



情報学広報



京都大学大学院情報学研究科

平成24年度



(写真:第13回情報学シンポジウムより)

目 次

[巻頭言]	●	第3回 京都大学情報学研究科 東京ミニ・オープンキャンパス 報告(実施日3/24)	●
ご挨拶	●	・教授 守屋 和幸	●
・研究科長 佐藤 亨	●	1	●
[随 想]	●	平成23年度公開講座の開催報告(実施日8/12)	●
5月の初めに	●	・教授 杉江 俊治	●
・京都大学名誉教授 後藤 修	●	27	●
移動のすすめと京大のよさ	●	南京市における「京都大学の日」部局別交流会 報告(実施日12/1~)	●
・京都大学名誉教授 佐藤 雅彦	●	・教授 守屋 和幸	●
5	●	28	●
[追 悼]	●	京都大学サマーデザインスクールの開催報告(実施日9/27~)	●
藤岡久也准教授の死を悼んで	●	・教授 石田 亨	●
・教授 山本 裕	●	29	●
8	●	第2回文化とコンピューティング国際会議の開催報告(実施日10/20~)	●
[紹 介]	●	・実行委員会 特定講師(特別教員研究) 稲葉 利江子	●
教育・研究生生活の折り返し地点にて	●	・ 特定助教(産官学連携) 林 冬恵	●
・教授 加納 学	●	31	●
9	●	同窓会イベント「超交流会2011」報告	●
ご挨拶—1998年10月7日のこと—	●	・京大情報学同窓会 会長 今村 元一	●
・教授 梅野 健	●	32	●
11	●	[諸 報]	●
新任スタッフの抱負	●	招へい外国人学者等	●
14	●	平成23年度受託研究	●
[報 告]	●	平成23年度共同研究	●
第13回情報学シンポジウム「災害と情報学」開催報告(実施日2/17)	●	平成23年度科学研究費補助金	●
・教授 吉川 正俊	●	平成23年度特別講演	●
16	●	学位授与	●
アジア情報学セミナー2012 開催報告(実施日3/14)	●	入学状況・修了状況	●
・教授 宮崎 修一	●	18	●
18	●	栄誉・表彰	●
京都大学 ICT 連携推進ネットワークの活動について	●	人事異動	●
・教授 西田 豊明	●	54	●
20	●	教員一覧	●
京都大学ICTイノベーション2012の開催報告(実施日2/17)	●	55	●
・教授 石井 信	●	日 誌	●
23	●	57	●
京都大学ICTイノベーションin Tokyoの開催報告(実施日3/23)	●		●
・教授 石井 信	●		●
24	●		●

◆巻頭言◆

ご挨拶

研究科長 佐藤 亨



4月より研究科長を拝命いたしました。この機会に研究科長の職務に関わる諸事について私の雑多な感想を述べ、皆様のご批判の糧とさせていただきます。

私は、総合大学における部局長の仕事は、協同組合の理事長などと同様に、構成員の足を引っ張らず、自由な活動を支援することに尽きると考えています。しかし、社会の環境は大学にも企業と同様のガバナンスを求める声が大いようで、学長や部局長の裁量と責任は拡大する傾向にあって、何もしていないことが許される状況ではなくなりつつあります。

まず研究に関しては、一つの大学や、まして一つの研究科の中だけで研究が完結することは今の時代には考えにくく、世界を見渡して連携するパートナーを見つけることが当たり前になっています。それよりは、異分野の専門家と接して異なる発想法を学ぶことに、総合大学に籍を置く意義があると思います。また私自身の研究分野を考えても、それをカバーするという単純な事実が、情報学研究科の対象領域がいかに広いかを端的に表しており、誰か一人の知識や経験に基づいて研究科全体の方向性を定めるなどというのは不遜な考えであることがわかります。日本のすべての大学に適用できるかは疑問ですが、少なくとも本研究科においては、他者の介入は採用時の選考に留め、その後の方向性は各教員の自主性に任せべきと考えます。従って、組織として行動すべきは教育に限定するのが現実的であると思います。

社会が大学の教育を見る目は年々厳しくなっており、最近では授業時間数を確保しているか、

学生の学習時間を大学が把握しているか、などというきわめて表層的なことまでが問われるようになりました。これは大学が、教育機関としていかに信頼されていないかをよく表しています。

これに対しては、組織の抜本的改革が必要という議論に傾きがちで、文部科学省がプロジェクトを募集するにあたって、組織の改編が必須というスタンスが目立ちます。確かに組織や体制は人の考え方も拘束するもので、大きな改革は組織の改編なくしては困難であるという論にはそれなりの説得力があります。しかし、改変すれば今より良いものができるというのは幻想にすぎません。検討するための時間も人材も限られた状況では、変化が大きければ大きいほど、設計はおおまかで粗雑なものになる危険をはらんでいます。

教育はそれを受ける人の一生に影響を与えます。現在の教育システムは、長い時間と多くの教員の努力の末に局所最適解に落ち着いて来たものですから、改変にも同程度の努力と時間がかかるという覚悟が必要と考えます。小さな試みからスタートし、徐々に適用対象を拡大して行く過程で問題を発見して、針路を修正する柔軟な姿勢が必要です。また、そこには短期的な評価の考えは整合しません。ある教育システムを評価するには、そこで教育を受けた人材が社会で活躍するようになるまでを見届けてから行う必要があると思います。

組織の改編に関しては、事務組織が先行しており、部局長も加わった検討が始まろうとしています。人員削減が不可抗力的に進む中で、業務の水準を維持するためには効率化が避けられませんが、ここでも大学が教育機関であることを常に意識し、教務のサービス低下が生じないように注意する必要があります。好むと好まざるとに関わら

ず、今の学生は明らかに大学をサービス機関と捉えており、教務職員の行き届いたサポートがなければ、落ちこぼれる学生をなくすことさえ極めて困難です。

内田樹氏が朝日新聞の「仕事力」というコラムに「消費者マインドの弊害」を書いておられます。最低の学習努力で最高の学歴を手に入れるのが「賢い学生」だという風潮への批判です。たしかに私がアドバイザーを担当する学部学生にも、ポートフォリオの自己評価欄に「16単位でよいA群科目を18単位取ってしまった」と「反省」している君がいて、愕然とします。しかし、そういう学生を営々と育ててきたのは我々教育者であって、大学教育がその弊害をどれだけ除去する努力をしてきたか、我々自身が教育の「効率」ばかりを考えていないか、について真剣に反省する必要があります。

教育のあるべき姿の一つとして、「時間の経つのを忘れて」何かに没頭する経験を持たせることがあると思います。これは昨今の学生が期待する「効率的な学習」の対極にある発想です。かつては、卒論や修論のテーマとして何か「世界で初めて」のものを与えられれば、それに没頭するのが普通でしたが、特に成績の優秀な学生の中に、その程度では釣られない人が増えているように思います。

情報学研究科で応募しようとしているリーディング大学院プログラムの準備として、昨夏に「サマーデザインスクール」、今春には「スプリングデザインスクール」が開催されました。残念ながら私はいずれにも参加することができませんでしたが、単位などで誘導することをしない、という石田先生の方針が徹底された結果として、学生の熱気の感じられるイベントになったと聞いています。この熱気を本番のプログラムにまで維

持することができれば、博士課程の充足率向上などという形而下の思惑を超えた教育効果が得られるのではないかと期待しています。

ただし、これには多大な人的コストがかかります。教育にかける努力が正当に評価される仕組みのないことは大きな問題で、一部の教員の熱意にのみ依存しては継続的な教育プログラムは成立しません。

多くの人は、自分が評価される尺度に合わせて努力します。何かを評価することの危険は、一見合理的な定量的尺度を定めることで、評価対象自体を歪ませてしまうことにあると思います。成績という単一尺度で評価されることしか知らない学生諸君が、これに順応しきっているのを責めることはできません。

同じことが教育・研究の評価についても当てはまります。今期中期計画においては教員評価の拡大が求められていますが、その弊害を抑止することには最大限の注意を払う必要があると考えます。研究評価については自己評価を基本とし、これに教育努力を正当に加える方法を模索して行くべきと考えています。

最後になりましたが、教育研究の環境については、中村前研究科長以下の皆様のご尽力により、8号館に続いて10号館の耐震補強が実現し、狭隘な面積の問題についても、吉田キャンパスにおける充足率の向上が近い将来に期待できる状況となりました。当面は、講義室や研究室の移動などご不便をおかけすることも多いと思いますが、もうしばらくのご猶予をお願いします。

本研究科を取り巻く状況はたいへん厳しく、かつ切迫したものとなっております。皆様のご指導とご助力を切にお願いし、ご挨拶にかえさせていただきます。

◆ 随 想 ◆

5 月の初めに

京都大学名誉教授 後 藤 修



日記にも、ましてブログやツイッターにも日頃全く縁のない私ですが、5月初め数日間の出来事を日記風に書いてみました。

5月1日(火) 曇、一時雨

東京お台場の産総研に通い始めてちょうど一ヶ月経った。京大に移る前に勤務していた研究所だし、その後も月に1~2度は訪れていたので9年間の隔たりを感じることもなくすんなりと溶け込めた。ただ、始業と終業の時刻を打ち込む「打刻」にはどうもなじめず、ほぼ毎日どちらかを忘れている。勤め人の頸木を今頃になって知ることになるうとは。

片道1時間強かかる通勤にもだいぶ慣れてきて、狭いゆりかもめの座席で肩身を狭めながらも読書できるようになった。幸い自宅のすぐ近くに市立図書館があるので気楽に読めそうな本を自由に選べる。先週までは池波正太郎の旅と食べ物に関する随筆2冊を読んでいた。当然東京(江戸)が中心だが、京都に関する話題も意外に多い。小林先生、佐藤先生と愛宕山に登った帰り道に立ち寄ってお団子を食べた平野屋も出てきて少し懐かしかった。それにつられた訳でもないが、今日から高沢英子の「京の路地を歩く」を読み始めた。著者について全く知らないが京大文学部を卒業された方らしい。一度でも行った場所や経験した風物に関する話題だとぐっと身近に感じる。丸太町橋のたもとに頼山陽が「山紫水明処」と名付けて晩年を過ごした家が今も残っていて往時を偲ぶことができるなど、うかうかと見過ごしていたことの多さに気づかされる。通勤の苦痛を補う

のに十分な楽しみが見つかり幸いだった。

なんと、今年度から産総研のメールシステムがグーグルに外注されることになり公私とも gmail を使うようになった。一企業に情報をすべて預けるのは何となく居心地が悪い。それはさておき、ようやく計算機環境も整ってきたので、以前より懸案であった自作プログラムのバグ取りを始めた。一応それらしい結果は出るがどうも不安定だ。Leaktracerの結果も条件によってはどこかで未解放のメモリーがあることを示している。バグ取りはロールプレイングゲームのような楽しみと誰かが言っていたが連休の谷間で他の用事の少ない今がチャンスだ。この期間中にすべてのバグを出し切ることができればよいのだが。

5月2日(水) 小雨

日本薬学会が出版している英文誌“Biological and Pharmaceutical Bulletin”に執筆した原稿のゲラ刷りが届いたので午前中はその校正に充てる。薬物代謝で中心的な役割を果たす一群の酵素であるチトクローム P450 遺伝子族の進化に関するミニレビューだ。今年は大村・佐藤がこのヘムタンパク質発見を報告した記念碑的論文の出版50周年に当たる。個人的にもひよんなことからこの遺伝子族に関わり始めてちょうど30年目の節目の年だ。動物と細菌からそれぞれ一つずつ最初のアミノ酸配列が解明された1982年当時に比べ、既知のP450遺伝子数は現在一万倍増している。一族の繁栄を図るP450遺伝子族のなかなかなしたたかな戦略の一端を明らかにすることがこのミニレビューの主眼の一つになっている。

昼食を終えてカフェのある隣の建物を出たときに、自分がどこにいるのか一瞬見失ったほどお台場でも急に緑が濃くなった。この季節の雨は穀

物だけでなく樹木も育てる。楠の並木や吉田山に包まれた京大構内は肺の奥まで緑に染まる風情になっているに違いない。

2年前に博士課程を卒業し米国の研究所でポスドクをしている W 君から、2年または3年間のポスドク延長の契約をすませた旨のメールが届く。テニユア獲得に向けてあちらこちらに応募しており、そのたびに推薦文を書いているがなかなかうまくいかない。米国では公的研究費が一律削減されたという話を聞いていたので、ポスドクの延長が可能になっただけでもありがたいことかもしれない。ひとえに W 君のがんばりによるものだが、研究者への道程がだんだん遠くなる現状はやはり憂慮すべきことだ。

5月3日(木) 雨

今日は連休後半の初日だが一日中雨の予報だ。家内は仕事で出かけているので、音楽でも聴きながらこの原稿を書くことにする。しかし、京都から持ち帰ったCDと元からのものがごっちゃになって聞きたいものがすぐに探せない。ふとラジオを点けると吉田秀和氏の声が聞こえてきた。40年来聞き慣れた話しぶりは相変わらずで何故かほほえましい位だ。あすはまだ雨が残るとのことなので遠出は控え、マティスの「赤い部屋」に再会するため、まだ行ったことのない国立新美術館のエルミタージュ展に出かけよう。

(再校時加筆：初稿校正後に吉田秀和氏の訃報に接しました。御冥福をお祈りいたします。)

◆随 想◆

移動のすすめと京大のよさ

京都大学名誉教授 佐藤 雅彦

情報学研究科のホームページを見るとこの『情報学広報』がアーカイブされており、「随想」は新しく名誉教授になった人達が書いておられるようです。私もその一人として執筆依頼があったのだと思います。研究科の皆さまのおかげでなんとか無事定年を迎え退職できたことを感謝しています。折角の機会ですので、ここでは、読者として研究科の若い人達、とくに院生や、これからこの研究科に進学しようと考えている人達を想定して想うことを書いてみます。以下で「あなた」という単語が出てくれば、それは、私が想定する、この随想の若い読者であるあなたのことです。

私が情報学研究科で担当した講座は「ソフトウェア基礎論講座」です。数理論理学の手法と考え方にに基づき、ソフトウェアの正しさを検証したり、正しさが最初から保証されるようなプログラムを作成する方法論について研究をしてきました。とくに理論計算機科学の分野で近年重要な概念となってきている、「文脈」(context)と「環境」(environment)についても力を入れて研究をしました。「文脈」と「環境」という言葉は日常生活でも普通に使われる言葉であり、私の理論的な考察も、これらの言葉の日常的な使われ方を参考にすることで進展してきました。

以下では、これら2つの言葉の日常的な使用について私自身の経験に基づき話をしますが、それが私のあなたへの「移動のすすめ」であり、私にとっての（そしてもしかするとあなたにとっての）「京大のよさ」です。

あなたは京都大学大学院情報学研究科修士課程の1年生です（たとえば）。あなたが今そうで

あるということは、あなたが一定の文脈と環境の中に存在しているということです。文脈とは今のあなたに至るまでの歴史であり、環境とはあなたを含むあなたの近傍の世界の状況のことです。環境には、あなたの両親や恋人も含まれるし、情報学研究科の先生、友人、設備もあなたの環境の一部です。

あなたはまだ十分若い。しかし、今のあなたに到達するまでには、それまでの瞬間、瞬間での文脈や環境に依存しながら、同時に、あなたも環境や文脈を変えてきたのです。たとえば、もしあなたが他の大学から京大の情報学研究科に来たのであれば、それはあなた自身の意思が作用した結果です。京大の学部から進学したとしても、あなたの意思によるものです（多分）。そしてその結果として「あなたの今の文脈」があり、「あなたが今その中にいる環境」があるのです。

このように、人は誰でも、その人固有の文脈と環境を抱えて、世界とインタラクトしながら生きていくこととなります。あなたが人生の目標を持つとすれば、当然それは、目標を立てる時点でのあなたの文脈と環境に依存します。そして、あなたが今の私の年齢になって、目標の達成度を振り返るときには、定年となったあなたの文脈（それはあなたの定年までの歴史です）をチェックすればすむことです。私はそのように、その時々目標を設定して生きてきました。そして達成度についても100%ではありませんが、十分に満足しています。もっと言えば、100%でない結果、これからもやるべきことが沢山あり、かえって喜んでいます。

私は15才(位)のときに数学者になる決心をしました。これは目標とも言えるのですが、その決心をしたときには、目標を立てたというよりは、数学者になりたいと思い、またそうなるに違いないと思ったのでした。実際その後10年たらずで、東大の数学科に進学、修士課程を修了し、京大の数理解析研究所の助手になることができました。15才の私は灘中の生徒で、灘で普通の成績ならば東大でも京大でも合格することはわかっていました。数学の研究者になるのには(京大も考えたのですが)東大に進学するのがよいと考えての結果です。ここでも文脈と環境が目標の実現に寄与したと考えています。

高校卒業まで神戸、大学の修士課程修了まで東京、それから京都に移り京大の数理解析専攻の博士課程に1年在籍し、数理研で3年間助手を務めました。これが私にとって京大での最初の4年間でした。京大で助手をしていたときに、当時スタンフォード大学の教授でAIやLispの創始者として知られるJohn McCarthy先生が数理研にしばらく滞在しました。私は東大の学生のところからコンピュータやロジックに興味があったので、McCarthy先生が数理研でした講義の影響もあり、理論計算機科学における基礎的問題に興味を持ち、ある目標を立てました。詳細は省略しますが、十分に大きな目標で、定年となった今、ようやく目標への具体的な道筋が見えてきたところです。このように20台の後半に研究者としての生涯を捧げる(!)に足る目標を持てたことは大変幸せであったと思います。ここでも、理論計算機科学の揺籃期に、その分野で最も将来を見通す能力のある人の近くにいたことが目標を立てることに寄与したと考えています。英語で“in the right place at the right time”という表現がありますが、これも文脈と環境の重要性を示す言葉だと思います。

数理研での助手の3年目にMcCarthy先生との共同研究を基に学位論文を書くことができ、学位取得と同時に東大教養学部数学教室の助教授

として異動(人事異動のこと)しました。東京に移って2年後に、その少し前に新設された東大理学部情報科学科に縁があって異動しました。さらに東京に移って9年後には、誘いがあって東北大学電気通信研究所に教授として異動しました。仙台に移って9年が過ぎたときに、京大の工学部情報科学科に異動し、その後設立された情報学研究科にこの3月まで在籍しました。京大には数理研時代を含めて20年在職しました。

これらの移動に際しては、そのまま留まるという選択肢もあったのですが、すべて移る方を選択してきました。その大きな理由は、どの場合も移動により、これまで経験していない素晴らしい環境に移れると期待したことだったと思います。実際、これらの移動により、空間的な場所が変わるだけでなく、理学、工学、教養といった学問に対する構えの違うところ、さらに、学部、研究所といった教育、研究に取り組む姿勢の違うところを経験できたことは、私の文脈形成にとって大変有益でした。そして、何より、移動のたびに新しく多数の優れた人と知り合うことにより、私の研究生生活豊かなものになったと考えています。また、定常的な研究の場は、国内の3大学でしたが、この間、何度も外国の大学、研究所に滞在し世界中の多数の研究者と知り合い、交流を続けることができたのも移動の大切さを示していると思います。

私が所属してきた、京大、東大、東北大を比較して京大のよさを語るとすれば、それは「百万遍境界の知的密度の高さ」であると言えます。これは情報学研究科初代研究科長の池田克夫先生が、たびたびそのように言っておられたことで、私もなるほどそうだとずっと思ってきました。東大も東北大も有力な総合大学ですがキャンパスが分散しています。京大は、いくつかの研究所と工学系は離れていますが、それ以外の理系、文系、教養の教員は百万遍境界に固まっています。とくに私の専門は数学、哲学に近いので、情報学研究科以外の複数の部局に関連する分野の教員がいるということは京大のよさでもあり強

みであると考えています。これまでも、百万遍の交差点、京大の構内やレストランで他部局の教員と遭遇し、ちょっとした会話をするということが数え切れない程ありました。また何か議論したいことやコピーしたい文献があったとき、数分歩く

だけで、理学部、数理解析研究所や文学部に行くことができます。このような京大のよさを確認するため、あなたも京大以外の場所を経験してみませんか。そこにはきっと京大にないよさがある筈です。



写真は、2004年夏に京都で撮影。
左から私、小林茂夫先生、Bruno Buchberger 先生。
Buchberger 先生は情報学研究科の招聘教授として
私の研究室に滞在しておられました。

藤岡久也准教授の死を悼んで

複雑系科学専攻 教授 山本 裕



複雑系科学専攻、応用数理学講座（知能化システム分野）准教授藤岡久也氏は、去る平成23年9月14日、外国出張中にブリュッセルの空港で客死された。

筆者はこれを滞在中のパリのアパートで就寝中、午前2時半に研究科事務室、野木事務長からの緊急連絡で知った。寝入ってから間もないことで、瞬間夢の中に居て何かを聴いたというような気持ちであった。

ミラノで開かれた国際自動制御連盟 (IFAC) の第18回 World Congressで彼の元気な姿に会ったばかりであり、バンケット会場を去るときに、次は日本でという簡単な会話を交わして別れてから、2週間強しか経っていない。その後彼はリール大学に招かれて2週間ほど共同研究のために滞在し、私はパリ第7大学 Supelec 研究所に招かれて滞在中であった。

事務長からの話では、大使館からご家族に一報があり、ベルギーの空港で倒れているところを発見されたが、死亡が確認されたのだという。詳しいことは全くわからない状況で、知らせを疑うというのではないが、さりとて現実のこととしてどう受け止めるべきなのか、すぐには的確な判断はつきかねるというのが正直な反応であった。

2日後、藤岡君の訃報であることが確認され、同時に夫人がこちらに向かわれることが明らかとなったため、筆者も家内とともに、パリからブリュッセルに向かった。なかなか大使館との連絡がつかず、夫人ら一行との連絡もつきかねたため、茶毘に付される当日にかろうじて間に合ったが、慌ただしく、またやつれきった夫人と僅かな言葉を交わすのみの別れとなった。遺骨はその後

夫人とともに帰国し、10月16日京都市上京区の園通寺にて葬儀が執り行われた。

ブリュッセル空港のラウンジで、ラップトップのPCを開けて仕事をする姿勢のまま動かないのを不審に思った乗客の一人の通報で異変が判ったが、懸命の蘇生努力にもかかわらず息を吹き返すことはなかったのだという。苦しんだ後もなく、安らかな顔だったのがせめてもの慰めであったと後で聞いた。

藤岡久也君は平成7年3月に東京工業大学大学院理工学研究科制御工学専攻博士課程を修了し、博士（工学）の学位を授与された。その後平成7年4月より大阪大学工学部に助手として奉職。平成10年の本研究科発足にあたり、当知能化システム分野の助教授として赴任、爾来13年余本研究科の教育研究に大きく貢献してきた。情報学科数理コース及び大学院複雑系科学専攻の種々の講義やセミナー、さらに学内委員として活躍し、専攻にとっても講座にとっても無くてはならない存在であった。

制御理論の研究者としてだけでなく、計算機に強く、オブジェクト指向プログラミングのような立場でCADデザインを論じ開発できる、稀なタイプの研究者であった。近年はサンプル値制御から発展し、伝送遅れのあるネットワーク制御で新しい展開を開拓しつつあるところであったし、IEEE Transactions on Automatic ControlのAssociate Editorや各種国際会議の運営委員、SICE Annual Conferenceのプログラム委員長を務めるなど、国際的知名度も上がりつつあるところであっただけにこの早世は惜しまれてならない。故人を知る多くの友人とともに冥福を祈りたい。

◆ 紹 介 ◆

教育・研究生活の折り返し地点にて

[平成 24 年 2 月 1 日付着任]

システム科学専攻 教授 加 納 学



2012 年 2 月 1 日付で、システム科学専攻人間機械共生系講座ヒューマンシステム論分野に着任いたしました。京都大学工学部化学工学科を 1992 年に卒業し、修士課程では工学研

究科化学工学専攻プロセスシステム工学 (PSE) 研究室に所属し、修了直後に助手として採用していただきました。24 歳の春です。以後、PSE 研究室で気儘勝手に教育と研究に取り組ませていただき、今、本稿執筆現在 42 歳です。論語の「年四十にして悪まるるは其れ終らんのみ」という言葉に頭を抱えている間に不惑の齢を数え、大学教員として折り返し地点が見えてきたこの時期に、今回の異動の機会に恵まれました。その縁に、またご支援いただいた方々に心より感謝しています。

教育者・研究者としての私が今あるのは、もちろん両親を含めて多くの方々に支えていただいたからですが、やはり PSE 研究室のボスであった橋本伊織先生の影響が大きいと感じます。遊び呆けて頭の使い方すら忘れていた学生に、教授みずから、論文の読み方、レポートや論文の書き方、学会発表の仕方を教え、学生を正気に返らせるだけにとどまらず、研究者への扉を開き、その論文原稿すべてを徹底的に校閲し、数多くの国際会議に参加させ、一流の研究者と出会う機会を与え、さらには海外留学も経験させていただきました。その留学にしても、論文博士制度で学位を取得した直後の私 (助手) が助成金獲得に失敗するや否や、「海外留学は若いうちに行かないと意味がない。必要なだけ研究室のお金を使っていいから、すぐに行け！」と檄を飛ばされ、その年の内に私

は渡米しました。この恩に報いるために、後生にどれだけのことをできるかが私にとっての課題であり、その想いを胸に情報学研究科でも教育や研究に邁進していくつもりです。

大学者になりたいと訴える大学新入生に対して、「はじめの半年はサボってはいけない。毎日、授業は五時間だ。鐘が鳴る前に部屋に入っておく。予習をちゃんとしてきて、章ごとに整理しておく。そうするといずれ、先生というものは本に書いてあることしかいわないことがわかってくる。(中略) 学問の成果を拾いまわってもムダなことだ。しょせん人間は自分が学べることしか学ばない」とメフィストフェレスは答えました。この問答をみると、ゲーテの頃から 200 年経っても、大学というところは大きく変化していないのかもしれない。

勿論、強烈な変化もあります。今春から工業数学 F2 という 3 回生向けの講義を担当することになり、フーリエ解析に関する資料を渉猟したところ、スタンフォード大学、ケンブリッジ大学、MIT 等で利用されている数百頁にも及ぶテキストを無料でダウンロードできました。さらに、スタンフォード大学の講義全 30 回すべてを YouTube で見ることもできます。もはや、私が講義をすることに意味があるのかと問わねばならない状況です。

その講義の初回に宿題としてアンケート調査を実施しました。設問は全部で 9 つあり、人生の夢、就きたい仕事、そのために心掛けていること、私淑 (または親炙に浴) する人物、座右の銘、座右の書、読書量、英語学習法、これから半年間の目標です。京都大学に入学できた学生ですから、頭が悪いはずはありません。しかし、頭が良いだけではいけないのではないかと。吉田松陰は「君子に

貴ぶ所のものは志のみ、胆のみ。胆なく志なくんば、則ち区々の才知將た何の用か之れ為さん」と書き送りました。このフラット化する世界にあって、京大生には我が国の将来を自分が担うのだという気概を持ってもらいたいですし、自分たちが恵まれた環境にいることに感謝すると共に、ノーブレスオブリージを果たすのだという高貴な使命感を持ってもらいたいと思っています。学部生活も残り半分となった学生に、色々と考えてみてもらいたいとの想いを込めたアンケートでした。

ここで、1つだけ調査結果を披露させていただきます。過去1年間に平均して1ヵ月に何冊の本を読んだかという質問に対して、過半数(36/61)の学生が1冊以下と回答しました。この結果を皆さんはどのように受け止められるでしょうか。私の経験からすると、この結果は何ら特別ではありません。工学部生の読書量はこれくらいでしょう。佐藤一斎は言志叢録に「凡そ学をなすの初めは、必ず大人たるを欲するの志を立てて、しかるのちに書読むべきなり。しからずして徒に聞見を貪るのみなれば、則ち恐らくは傲りを長じ、非を飾らん」と書いています。しかし、まだ志を立てていないにしても、将来を囑望される京大生にしては読書量が少ないと感じます。PSE研究室では私が独断と偏見で集めた課題図書の本棚に並べ、読書を奨励していました。デール・カーネギーの「人を動かす」や安岡正篤の「青年の大成」などを読み、強く影響を受ける学生もいます。そういう機会を与えることも一教員としてできる価値あることであろうと考えています。

新渡戸稲造は「知能ではなく品格が、頭ではなく魂が、骨折って発達させる素材として、教師によって選ばれるとき、教師の職業は聖なる性格をおびる」と述べ、ヒルティは「教育の秘訣は本来、学生を導いて一方では彼等の仕事(勉強)にたいする愛好心と熟練とを得させ、他方では適当な時期に、なにか偉大な事柄に生涯をささげる決意をいだかせるように仕向けることだ」と述べました。そこまでは到達しないにしても、何かしら良きものを学生に与えられるよう努力したいと思います。

上述のような事柄も含めて思い付くままに書いているためか、学外でお会いする方から「ブログ読んでます」と言ってくることが少なくありません。半導体、製薬、化学、鉄鋼など様々な産業界の共同研究者には、研究成果もさることながら、人材育成方針にも共感していただけているのではないかと思います。

社会に貢献する研究を標榜し、仮想計測技術やプロセス制御といった分野における刺激的な共同研究を続けていくと同時に、今後は情報学研究科の一員として、新しい分野にも挑戦していきたいと考えています。

SF作家のアーサー・クラークが提案した三法則の最後は「十分に発達した科学技術は魔法と見分けがつかない」というものです。情報学研究者は現代の魔法使いになれるでしょう。そして、社会に大きく貢献できるでしょう。そんな想いも抱きながら、研究科の教職員の皆様および学生諸君と共に一日一日を充実したものにしていけるようにと願っています。どうぞよろしく願いいたします。

◆ 紹 介 ◆

ご挨拶 —1998年10月7日のこと—

数理工学専攻 教授 梅 野 健



京都に来てあの日のことを良く思い出す。あの日は、3年間のポスドクを終え、国立研究所に就職して半年程たった1998年10月7日のことである。

ポスドクとして3年間、ある一つのテーマに没頭した。ただ3年間没頭した割には、決定的な成果が出たとは言えず、曖昧な結果に終わった。その意味を再び考えるため、1998年10月7日、いつもの通り新しい職場での研究を18時に終え、夕方から帰宅時間までは、ポスドク時代の曖昧な結果の意味を追求するのにこだわって、自主研究（＝個人研究）と称して行っていた。ポスドクとしての3年間は、上司にも恵まれ、自由に研究でき、また研究環境も抜群のところであった。曖昧な結果とは、自ら設定したテーマである“カオスで計算できるのか？”、“何か計算上のメリットがあるのか？”、“定量的に明らかにできるのか？”、において、決定的な結果が得られていなかったことである。つまり、テーマ設定し、定量的にパフォーマンスを計測できる汎用のアルゴリズム（カオスモンテカルロ計算法）を作った（その後、論文、及び、日本と米国の特許となった）ところまでは良かったが、その計算結果が、ある場合は、通常の乱数と比較してカオスの方が計算誤差の収束が早くなるが、また別の場合には、同程度となり、いったい何が効いてカオスを用いた方が良くなるのか、常に良くする方法があるのかが、当時解らなかったのである。もしかして、研究テーマ設定自身が間違っていたのであろうか？そんな疑問を持ちながら、再び、自主研究を行っていた。

当時、ポスドク時代を過ごした埼玉県和光市から東京都小金井市へと研究所の場所も変わり、周辺的环境と、そこにいる人も当然のごとく、全て変わった。「研究環境が変わると新しい発想が生

まれ、新しい研究成果、解決法が生まれることがよくある」という大学院学生時代の指導教授の言葉を思い出し、“私にも何か、本当のブレークスルーが起こるのでは？”と期待していたことも事実である。が、半年間（1998年4月—1998年9月）は、研究所の異動の手続き、引っ越し、及び新しい研究テーマの立ち上げもあり、何も起こらなかった。不安と期待が半々、1998年10月7日は、ちょうどそんな日であった。

ところが、1998年10月7日、いつもの様に初期設定を微妙に変更しながら、コンピュータを動かして、暫くしてディスプレイを見てみると、コンピュータが不思議な結果を示していたのである。ポアンカレが昔、「数学者が自然界の法則と考へ、物理学者は数学の定理と信じている」という程、普遍的で汎用性を持つ中心極限定理から、モンテカルロ計算誤差の分散（MSE: Mean Square Error）は、計算時間Nに反比例するという結果が、独立な乱数を用いる場合に一般に成立する。ところが、コンピュータは、図1の様に、カオスを用いると誤差分散 $MSE = V(N)$ は計算時間Nの二乗に反比例する！という結果をたたき出していたのである。この様な結果は見たことが無かったし、何よりも信じ難かった。そして驚くことに、通常の乱数のパフォーマンスよりも、このカオスを用いた方が桁違いに計算誤差の収束が早く、圧倒的なパフォーマンスを示していたのである。通常、この様な状況に出くわしたら、まず考えるのが、結果を出力するプログラムのミス（計算ミス）であろう。当然、自分も何度もチェックしたが、そこはポスドク時代から何度もやっていた計算であり、ミスでは無かった。では、この現象が事実とすると、その理由は何であろうか？何故、圧倒的なパフォーマンスを達成できるのか？その日から、その現象が起こる理由を考えた。何とか2か月で結果と理由を説明する理論（カオスの持つ負の自己相関が誤差の圧倒的

減少に寄与していたことが判明) を作り、その現象をパラメータ推定でも知られている言葉である "Superefficiency (超効率性)" と名付けた。2 か月ちょっとで論文にまとめ、米国の権威ある物理学学会誌に自信を持って投稿した。当時、映画のタイタニックが流行っていて、私も魅了され、何度も観た。そんな中、レフリーレポートから、“この論文を読むのは、タイタニック的な努力を要する” という言葉で掲載拒絶の返事が返ってきた。これは決して学生の論文を読んだ感想に言っただけの言葉だが、当時は、ポストドク時代含め、2度アクセプトされた学会誌であり、結果に自信があるだけに大変ショックであった。が、それもすぐ醒め今度は日本の学術誌に1999年10月に再投稿し、こちらはすんなりアクセプトされ、2000年3月に出版された。以上が、1998年10月7日の "Superefficiency (超効率性)" の発見の経緯である。

その後、私は、この負相関による "Superefficiency (超効率性)" の原理を任意の信号で実現できるフィルタ (名称: ルベークスペクトルフィルタ) を、エルゴード理論に基づき考案し、特許を取得した。これは、CDMA (Code Division Multiple Access) という現在広く普及している第3世代移動体通信方式でも使えるものであり、このフィルタを用いると、干渉雑音の分散を減らすことで、通信キャリアが設置する基地局の数を減らすことができる。この提案は、ある政府系の研究費配分機関に採択されたが、その提案した内容と同じ文句で、当時勢いのあった日本の基地局メーカーに本フィルタの特許の売り込みに行った。

2001年頃のことである。当時、3G (第3世代携帯電話) は、まだ新しく、これから日本で基地局が増えていくという時期であった。基地局一台の値段が約一億円程であった。私の提案は、基地局の数を減らしても、同じ通信品質を保証する (同一通信品質を保証する社会コストを低減する) というものであった。しかし、基地局の販売台数に売り上げが正比例する基地局メーカーからは、逆に、基地局メーカーの売上を減少させる提案と受け取られ、却下された。そこから学んだことは、数理の工学的応用、工学の真の応用には、その時の社会のニーズ、背景、環境との関係とがマッチしていないといけないことであり、我々は、技術の供給者側のロジックだけでなく、真の社会ニ

ーズを深く、そして謙虚に学ぶ必要があるということである。そのことは、テレコムシステム技術賞という荣誉ある賞をいただいたこのフィルタ技術にも当然、当てはまる。賞の学術的権威と社会的実用性は全く関係無いのである。が、このマッチングも時代とともに変わる。最近、スマートフォンが全世界に増えてきて、特にユーザー数が激増している発展途上で、基地局の数を増やしても、通信が途中で随時途絶えるという問題が頻繁に起こってきている。基地局の仕様をほとんど変えずに、同時接続可能なユーザー数を稼げるこの負相関フィルタのニーズが、急に高まってきたのである。風向きが変わったのだ。つまり、時代とともに、社会的ニーズが変わる。が、変わるまでは、10年間風すら無かったのである。ここで述べたことは、最近このフィルタ技術の導入の関連で招待されて赴いたインドネシア等の発展途上で、日本製のスマートフォンが中々入り込めないのと同じ事情であると考えられる。

以上、1998年10月7日のことを数々の反省とそこから得られた教訓を含めて、私の2012年9月1日付数理工学専攻 数理物理学講座 物理統計分野への着任のご挨拶として紹介させていただきました。今後やるべきでありそしてやってみたい研究分野としては、図2にある今までの研究テーマ以外に、数学、物理学、情報学の共通の基礎学問として、非平衡統計力学の、情報分野、通信分野、計算論との接点、融合領域への拡張を考えております。エントロピー生成というのが、これら3つの異なる学問分野において、共通する本質的な概念だと思えます。また、非平衡統計力学を拡張するためには、エルゴード理論、確率論を基に新しい基本解析ツールを一から作ることも必要となります。これらの基本ルールを基に、電力情報統合型ネットワーク (スマートグリッド) の設計構築といった新分野に重点的にチャレンジしてみたいと考えております。情報セキュリティの分野も、今まで以上に物理が密接に関係してくるに違いありません。情報の保存則 (情報学第一法則) がエネルギー保存則 (熱力学第一法則) と同レベルで存在するとすると、それは、対象となる情報の解読困難性の概念無しには成立しない概念だと思えます。

私の抱負は、この1998年10月7日の様なエキ

サイティングな時間を、もう一度、いや、今度は学生といっしょに共有したいと考えております。私自身は、愛知県名古屋市で生まれ、高校卒業以来、東京に住み、そして、2012年に上洛しました。1990年に早稲田大学理工学部電子通信学科卒業、1995年に東京大学大学院理学系研究科物理学専攻で博士（理学）の学位をとり、理化学研究所基礎科学特別研究員、郵政省通信総合研究所（現在の独立行政法人情報通信研究機構）研究官、主任研究官、主任研究員、途中、独立行政法人理化学研究所次世代移動体通信研究チームリーダー

（非常勤）兼務、を経て、本年4月に京都大学に着任いたしました。つまり、私自身は、名古屋（18年）→東京（27年）→京都（3都市はほぼ直線上に載っている）という真つすぐな負相関性を有する空間履歴を持ち、そしてイニシャルはKUとなります。

本学ならびに情報学研究科の教育・研究のより一層の発展と、数理工学及び研究上関連する産業界の発展と復活に貢献すべく、大変微力ではありますが、精一杯尽力する所存ですので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

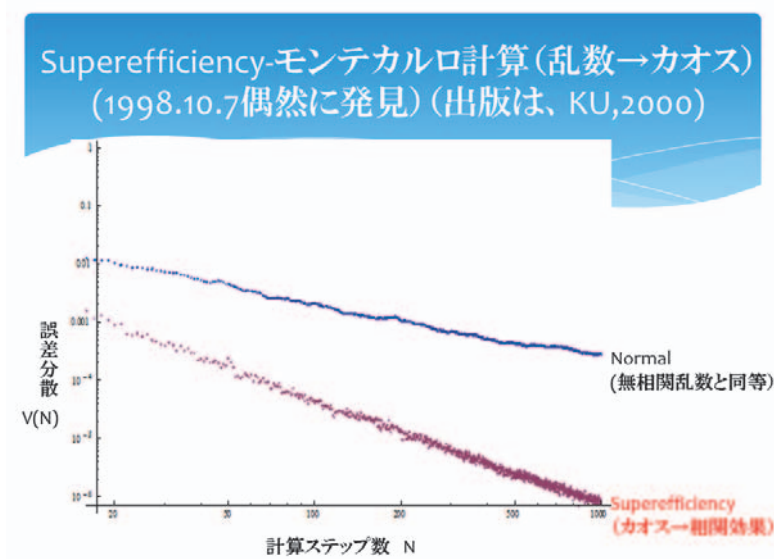


図1 1998年10月7日に偶然に発見したカオスのSuperefficiency（超有効性）

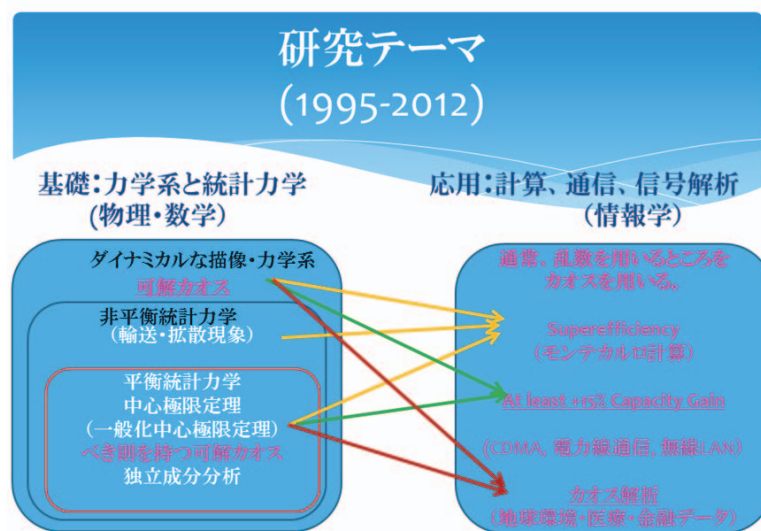


図2 博士号取得時（1995年）から現在（2012年）に至るまでの研究テーマ

◆紹 介◆

新任スタッフの抱負

[平成 23 年 6 月 1 日付着任]



知能情報学専攻
知能メディア講座
音声メディア分野
助教 糸山 克寿

2011 年 4 月に知能情報学専攻音声メディア分野の特定助教、6 月に同分野の助教に着任いたしました。確率・統計的アプローチに基づく音声や音楽音響信号の認識・分離に関する研究を中心に、それらの技術を応用した検索手法や音楽鑑賞システムの構築に取り組んでいます。京都大学には学生時代から 10 年間在籍しており、恵まれた環境で研究が進められることに感謝しております。これからは研究に加えて、教員として優れた学生を多数送り出せるよう、教育にも尽力していきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

[平成 23 年 7 月 16 日付着任]



社会情報学専攻
社会情報モデル講座
分散情報システム分野
助教 清水 敏之

2008 年 3 月に本研究科社会情報学専攻博士後期課程を修了し、そのまま所属研究室において学振 PD、特定助教を経て 2011 年 7 月に助教として着任いたしました。学振 PD 時にはアリゾナ大学において客員研究員として研究する貴重な機会を得ることができました。XML などの半構造データに対する検索や、最近では地球科学データのメタデータ管理・検索に関して行っており、多種多様なデータをいかに上手く管理、検索するかという点から研究を進めています。まだまだ若輩の身ですが、これまで教わってきたこと、自分が行ってきたことを生かしながら教育、研究に邁進する所存ですので、よろしく願いいたします。

[平成 23 年 10 月 1 日付着任]



社会情報学専攻
社会情報モデル講座
情報図書館学分野
准教授 山 肩 洋 子

2011年10月に社会情報学専攻 社会情報モデル講座 情報図書館学分野の准教授として着任いたしました。博士課程の学生の頃は、本研究科知能情報学専攻で調理観測映像の認識と調理支援システムの開発を目指して研究を行っていましたが、博士号を取得後、独立行政法人 情報通信研究機構に異動してから3年間は、全く別の分野である立体音響の研究に携わりました。

このたび、社会情報学専攻に所属させていただき、新たに情報検索の研究を始めようとしています。いろいろな分野の研究をすることには不安もありますが、広い視野で研究を進められるよう、また広い分野の教育ができるよう、頑張っています。

どうぞよろしく願いいたします。

[平成 23 年 10 月 1 日付着任]



知能情報学専攻
知能情報ソフトウェア講座
知能情報基礎論分野
助教 吉 仲 亮

東京大学より学位取得後、フランスの INRIA、北海道大学大学院情報科学研究科、JST ERATO 湊プロジェクトそれぞれでのポスドク修行期間を経て、昨年10月より本学に助教として着任いたしました。主に形式言語の学習理論を研究しております。教育活動に携わるのは本務が初めての経験となりますが、京大生の能力を信じ自主自学の精神を尊重しながら、学問の悦びを伝え、共に愉しみたいと思っております。微力ながら、学界および本学の発展のために誠心誠意尽くして参ります。皆様方には何卒ご指導ご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。

[平成 24 年 4 月 1 日付着任]



通信情報システム専攻
コンピューター工学講座
計算機アーキテクチャ
助教 高 瀬 英 希

2012年4月1日付で通信情報システム専攻 助教として着任しました高瀬と申します。3月に名古屋大学大学院情報科学研究科博士課程を修了したばかりでして、まだ「先生」と呼ばれ慣れない日々を過ごしています。

学生時代の専門は組込みシステムで、特に、コンパイラやリアルタイム OS といった複数の設計階層における技術の協調によって、組込みシステム全体の消費エネルギーを最小化する研究に従事

しています。今後は、基盤ソフトウェア技術の観点から、単一の組込みシステムの最適化に留まらず、グリーン・イノベーションや社会全体に貢献できるような研究課題に取り組んでいく所存です。

研究活動のみならず教育活動に精一杯尽力いたしますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしく願いいたします。

第13回情報学シンポジウム「災害と情報学」開催報告

社会情報学専攻 教授 吉川正俊

第13回情報学シンポジウムは、2012年2月17日に「京都大学 ICT イノベーション 2012」の連携イベントとして開催した。今回のテーマは、「情報学と災害」とし、東日本大震災の発生から1年弱が経過した時機に当たって、情報学が災害にどのように向き合うことができたか、また今後どのような課題が残されているかを考える機会となった。本学では、2011年7月以降、学術シンポジウムシリーズ「大震災後を考える」が開催されており、今回の情報学シンポジウムはその一環としても位置づけられた。

全体のプログラムは、4件の講演とパネルディスカッションから構成された。第1部は、「クライシスにおける情報」をテーマとし、最初にグーグル株式会社の賀沢秀人氏から「Google Crisis Response」と題する講演が行われた。震災発生直後から、安否情報確認サービスである Person Finder や自動車通行実績情報マップの掲載、被災地の衛星写真の提供などが間髪を入れず実施されたことが紹介された。また、避難所に紙で掲示される名簿を写真に撮り画像共有サイトにアップロードするというアイデアをネット上で発見し、それを Person Finder にデータを収集するための方法としてすぐに実行したことや、その後、大量のアップロードが始まり目視による検索が困難になったこと、さらに、写真に写っている名前をテキスト入力するボランティアが利用者の中から自然に生まれてきたことなどが臨場感を持って紹介された。ソーシャル情報サービスや、ネットを介した多数の人間によるクラウドソーシングがうまく結びついた事例であるが、賀沢氏からは後者については参加の敷居が低いことや進捗が明らかなことが今回の成功原因として考

えられるが、この成功は全くの偶然であったとの見方が披露された。

続いて特定非営利活動法人 ITS Japan の八木浩一氏から、「東日本大震災における ITS の取り組み～通行実績・道路規制情報～」と題する講演があった。カーナビからの情報を収集することにより、自動車をプローブと見立ててポイントごとの速度を集め道路の渋滞状況などを調査するサービスは、平時から自動車、カーナビなどのメーカ各社が会員を対象として実施していたが、東日本大震災発生直後に民間各社に対して ITS Japan へのプローブ情報提供が要請され1週間後には一般への提供が実現したことが紹介された。また、その後、国土院が集約し公表していた通行止め情報も統合され一元発信されたことが紹介された。また、2011年台風12号における取り組みでは、乗用車とトラックを区別した通行実績・道路規制情報の提供が行われたことも紹介された。災害を機に、民間連携、官民連携により従来よりも精度の高い情報が一般提供できた好事例であるが、発災後すみやかにこのような統合情報を提供できるように運用ルール、手順を策定することが今後の課題として提起された。

第2部では、「情報の共助をめざして」をテーマとした2件の講演が行われた。まず、株式会社ウェザーニューズの中神武志氏による「Join & Share で創る情報による“自助・共助減災学”」という演題の講演があった。観測情報に加えて約30万人のリポーターがケータイから報告する天気リポートに基づき予報を行うことが、新しい天気予報の形として重要になっていることが報告された。また、そのような具体的な例として「ゲリラ

雷雨防衛隊」が紹介された。これは、積乱雲が急激に発達すると予想される時に会員に雲の監視を依頼することにより、雲の写真とレポートを集積しゲリラ豪雨の予測に利用するものであり、日本に限定すれば76%の精度で的中することが新聞等でも報道されたことが紹介された。また、東日本大震災発生直後には、震災情報共有オペレーションとして、ウェザーレポートをベースにその時々には起きていることをリアルタイムに情報共有するシステムが提供され、カテゴリ分類されたりレポートをアイコン化しマップ上に展開しフリーダウンロード可能としたことが紹介された。また、次のステージに向け、詳細な減災情報の提供時に発生する個人情報などの法的な壁を含むいくつかの課題が提示された。

次に、NHK 大阪放送局の近藤誠司氏による講演「東日本大震災の災害報道を振り返る～社会的リアリティの構築をめぐる～」が行われた。テレビは災害直後の情報媒体としてある程度の役割を果たせたものの、震災発生後の放送内容を分析すると、最初の30分間では四分の一以上が東京の情報であったなど東京のオペレーションセンターにおいて感じられるリアリティに基づいた情報に偏重していたことや、個別具体の地点に対する「呼びかけ」を徹底できていなかったことが考察として紹介された。また、ボランティアな救援活動の必要性をめぐるのは、社会的なリアリ

ティが十分ではなかったとの考察が行われた。大手マスメディアによる報道は、津波よりも原発の方が相対的に多く、ボランティアに関する報道はかなり少なかったという分析結果が紹介された。また、企業団体などの組織的、専門的な支援活動に関する報道自体には誤りはないが、ボランティアは「かえって迷惑」という、「メタメッセージ」(暗黙的なキャンペーン)となった可能性が指摘された。

最後に、4名の講演者に本学防災研究所の矢守克也教授、畑山満則准教授を加えた6名によるパネルディスカッションが行われ、震災直後に行われた密度の濃い仕事の伝承、現地訪問によるリアリティ獲得の重要性、震災後の活動の検証などに関する活発な意見交換が行われた。

このように、今回の情報学シンポジウムでは、東日本大震災などの震災後に情報がどのように活用され、今後に向けてどのような課題が残されたかを中心に話題提供、意見交換が行われた。会場からも活発な質問、意見が寄せられ密度の濃いシンポジウムとなった。末筆ながら、ICTイノベーションとの連携にご協力頂いた石井信教授、プログラム作成および当日の進行でお世話頂いた矢守克也教授、畑山満則准教授、準備のために多くの時間を費やして頂いた馬強准教授にお礼申し上げます。



アジア情報学セミナー 2012 開催報告

学術情報メディアセンター（情報学研究科 知能情報学専攻）准教授 宮崎 修一

本年度のアジア情報学セミナーは、韓国 大田（テジョン）市にある忠南大学（Chungnam National University）にて開催された。大田市は韓国南西部に位置し、インチョン空港より高速バスを使うと約2時間半で到着できる。忠南大学は1952年に設置された国立大学であり、教員約1,000名、学部生約26,000名、大学院生約5,400名が在籍する総合大学である。今回のセミナーの目的は、研究者や学生の交流、互いの大学や研究科の紹介、本研究科への留学情報の提供などである。日程は以下の通りである。

- 3月13日（火）関西空港発、現地着
- 3月14日（水）忠南大学にてセミナー開催
- 3月15日（木）現地発、関西空港着

京大側からの参加者は以下の通りである。学生は韓国からの留学生を優先的に選抜し、希望した6名全員が遠征することとなった。

- 守屋 和幸 教授（団長）
- 岡部 寿男 教授
- Xuefeng Liang 特定准教授
- 荒井 修亮 准教授
- 村田 英一 准教授
- 宮崎 修一 准教授
- 野木 正博 事務長
- 斎藤 貴之 主任
- JooYoung Ahn
- Eui-Hyun Kim
- Junho Choi
- Soungwoong Yoon
- Min-Seon Lee
- Sin-Nyoung Kim

近隣の大学や研究機関にも開催案内を流して

頂いたため、セミナーへは忠南大学以外からの参加も見られた。総参加者数は44名であった。

セミナーでは、最初に各大学が15分ずつを使い、大学や研究科、学部の説明を行なった。本学の説明は、団長の守屋教授が担当した。テクニカルセッションは3つ用意し、各セッションでは忠南大と京大からそれぞれ1名の研究者が、45分の持ち時間で講演を行なった。本学からは荒井、Liang、村田の各准教授が講演した。



[オープニングの様子]



[荒井 修亮 准教授の講演]



[Xuefeng Liang 准教授の講演]

テクニカルセッションの合間に1時間のポスターセッションを設け、京大から6名、忠南大から6名の学生が、各自の研究内容を紹介した。発表を行なった学生全員に、感謝と激励の意味を込めて楠マーク入りの京大オリジナルコインケースをプレゼントした。



[ポスターセッションの様子]

最後に、情報学研究科への留学案内を行なった。まず Liang 准教授が10分程度で概要説明を行ない、続いて京大から参加の留学生6名が、自己紹介や京大での留學生活についての説明を行なった。その後、韓国の学生からの質問を受け付け、留学生がそれに答えるという形式で進化した。留学生の自己紹介や質疑応答は韓国語で行なわれた。京都大学を紹介するマンガ「MANGA Kyoto University」の韓国語版を20部ほど持参し、現地の学生に配布した。学生の間で非常に好評であった。なお、本マンガには、今回参加した荒井准教授も掲載されている。



[留学説明会の様子]

セミナー終了後は、韓国の伝統料理のレストラン「母情」へ移動し、懇親会を行なった。韓国側からも多数参加して頂き、参加者総勢28名の盛り上がりを見せた。セミナーの場ではやや緊張していた学生も、寛いだ表情を見せており、日韓の交流を深めるのに大きな効果があったと言える。



[懇親会の様子]

本セミナーの開催に当たっては、DaeYoung Kim 教授をはじめとした忠南大学の教職員、学生の皆様に大変お世話になった。ここに感謝の意を記し、本報告を締めくくる。



[集合写真]

京都大学 ICT 連携推進ネットワークの活動について

京都大学 ICT 連携推進ネットワーク 2011 年度委員長 教授 西田 豊明
(知能情報学専攻)

京都大学 ICT 連携推進ネットワークは、京都大学大学院情報学研究科と学術情報メディアセンターが 2008 年 2 月に共同設立したプログラムであり、産業界および社会との間の連携活動の推進と支援を目的としています。

2011 年度は図 1 に示すように、産学連携コーディネーション、サイエンスカフェ、ICT イノベーション¹⁾を行いました。

産学連携コーディネーション

産学連携コーディネーションは、産学共同研究であり、ICT 連携推進ネットワークに参加している企業との間でマッチングに基づく共同研究を推進しています。すなわち、情報学研究科および学術情報メディアセンターの間で、ニーズとシーズのマッチングを探り、マッチングに成功したところから共同研究を進めそれを ICT 連携推進ネットワークの委員会がサポートする、という枠組みになっています (図 2)。

2011 年度までにこの枠組みを使って、延べ 7 個の共同研究プロジェクトが行われました。共同研究のスタイルは、プロジェクトごとに最適と考えられるものを参加者の協議により定めることになっていますが、社会・産業セクターに属するコーディネーション参加者が自分の抱えている問題や取り組みたい共同研究のイメージをもとに情報学研究科と学術情報メディアセンターに共同研究を呼び掛け、これに対してシーズを持っていたり、ユニークなアイデアをひらめいた教員が応じて、協議を重ねて的を絞っていく、というスタイルが基本です。

これまで共同研究テーマとして取り上げられた課題は、図 3 に示すように、エネルギーマネジメント、マルチエージェントシステム、自然言語

処理、クラウド翻訳など、情報学研究科・学術情報メディアセンターの教員の研究の強みを生かしたテーマになっています。



図 1: 京都大学 ICT 連携推進ネットワークの組織

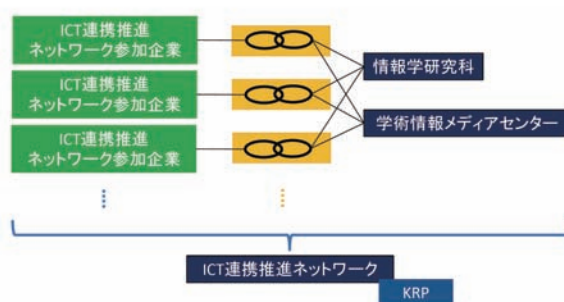


図 2: 連携推進コーディネーションの枠組み。業務の一部を京都リサーチパーク (KRP) に委託

さらに、企業から大学に研究を委託し、大学がその成果を企業に報告するという従来の図式をかなり超えたところまで踏み込んで、大学主導で都市交通デザインといった公的なプロジェクトを行う、大学教員が共同研究テーマの基礎についてレクチャーを行い、若手育成の支援をする、企業の方からも実際のデータを共同研究の場にもちこんで、商品企画早期の段階から大学教員と踏み込んだ討論を行う、などのチャレンジも試みられつつあります。

2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
パナソニック・山本裕教授・永原正章助教「新世代家電機器群『新エコホーム』のCO2削減方式に関する研究」／「マイクログリッドシステムにおける最適制御方式の研究」／「蓄電池システムの分散・協調制御方式の研究」			
パナソニック・石田亨教授・服部宏充助教「個人の行動・嗜好に基づく群行動ナビゲーション方式に関する研究」／「個の行動・嗜好に基づく群行動のナビ制御による地域EMSの実現」			
パナソニック・伊藤大雄准教授「新世代家電機器群『新エコホーム』のCO2削減方式に関する研究」			
		日本電気・黒橋禎夫教授「言語解析用語彙属性の自動抽出技術に関する研究開発」／「文脈情報を用いた情報抽出技術に関する研究開発」	
		ヤフー・黒橋禎夫教授「日中・中日用例ベース機械翻訳の実用化のための『調査／開発』研究」	
		石田大成社・石田亨教授「クラウド翻訳の研究」	
		デンソー・石井信教授「超解像技術に関する研究」	

図3：連携推進コーディネーションプロジェクト（～平成23年度）

ICTサイエンスカフェ

地域に対するアウトリーチ活動として位置づけられるこの取り組みは2010年度に新設されました。話題提供と自由な討論、その後の交流会を通じて、次代の産業と京大との新しい開かれた関係を構築するための試みを行っています。各回、情報学研究科あるいは学術情報メディアセンターの教員が2人、持ち時間各30分程度でトークをし、そのあとに交流会が続く、全部で3時間ぐらいの会になっています。表1のように初回から2011年度までに6回のサイエンスカフェが開催されましたが、地元から50人ぐらいの参加者があり、いずれも満員御礼の状態になっています。

参加者へのアンケート調査の結果、「抽象的なものから具体性のあるものまでかなり広い範囲で話題提供が行われていて参考になる」、「話者の年齢が高いので話の中心に哲学的な側面や今後のビジョンなどが入っていて参考になる」、「発表会ではないのでかなりフランクにいろいろなことをずけずけと訊ねることができる」など、大変ポジティブなりアクションをいただいています。

ICTイノベーション

2006年度から産官学連携本部と共同で行っている取り組みであり、京都大学の情報学研究に関係するフェスティバルとして位置づけられています。

情報学研究科と学術情報メディアセンターの若い教員と学生による研究発表を軸に、就職説明会、企業説明会、交流会、ICT連携推進ネットワーク委員会もセットにしています。2011年度はさらに情報学シンポジウムもセットにしてワンストップで京都大学の情報学研究に関わる活動をいろいろなアングルから見ることのできる「京都大学情報学研究ショーケース」としての位置づけが定着しつつあります。

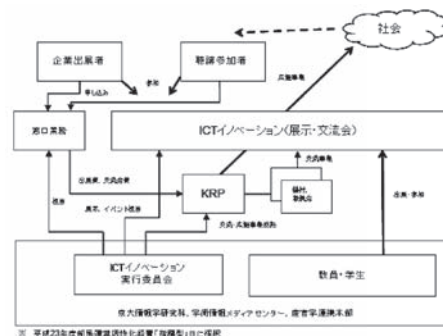


図4：ICTイノベーション20XXの運営体制

表1：サイエンスカフェ開催一覧（～2011年度）

第1回	2010年9月29日	デジタルと信号と音の処理について（山本裕教授） 伝播と超音波で超解像度解析（佐藤亨教授）
第2回	2011年1月20日	ホームワイヤレスネットワークの現状と将来について（守倉正博教授）
第3回	2011年4月15日	クラウド (cloud) からクラウド (crowd) へ（石田亨教授） コミュニケーションの脳内メカニズムを探る（乾敏郎教授） アクチュエータとセンサの壁を超える（杉江俊治教授）
第4回	2011年6月27日	「まばらさ」の効用（田中利幸教授） エネルギーを情報化する！？（松山隆司教授）
第5回	2011年10月3日	不確実な世界を観るための統計的画像処理（石井信教授） アート、カルチャーとITの融合から生まれるビジネス（土佐尚子教授）
第6回	2012年1月24日	コンピュータに社会性を与えよう（喜多一教授） コンピュータによる言葉の理解をめざしてー 超大規模コーパスの活用ー（黒橋禎夫教授）

表2：ICTイノベーション (ICT20XX) の規模の推移

	参加者数	学内展示パネル数	参加企業数	交流会参加者数
ICT2007	604名	63	—	134名
ICT2008	531名	67	40社	126名
ICT2009	639名	70	51社	106名
ICT2010	613名	70	51社	71名
ICT2011	639名	61	45社	132名

ICTイノベーションは表2に示したように参加者数約600名、交流会参加者数約100名の学内有数のビッグイベントになっています。これを運営するために、図4のような体制で取り組んでいます。

以上について、より詳細な報告はICT連携推進ネットワークホームページ：

<http://ict-nw.i.kyoto-u.ac.jp/>

および既刊広報誌電子版：

<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/archive/public.html>

をご覧ください。

注

- 1) これには、京都大学産官学連携本部も参加しています。

京都大学 ICT イノベーション 2012 の開催報告

システム科学専攻 教授 石 井 信

2012年2月17日金曜日に、百周年時計台記念館において、京都大学において研究開発されている情報通信技術を公開し、産官学連携を促進するためのイベント「京都大学 ICT イノベーション 2012」が、情報学研究科、学術情報メディアセンター、産官学連携本部の主催、総務省、文部科学省、経済産業省、京都府、京都市、京都商工会議所、京都産学公連携機構、財団法人京都高度技術研究所、財団法人大学コンソーシアム京都、日本経済新聞社京都支社、京都新聞社、京都大学グローバル COE プログラム「知識循環社会のための情報学教育研究拠点」の後援、京都リサーチパーク株式会社の協力の下で、開催された。29件の口頭発表、64件のポスター・デモ展示があった。また、関連行事として、同日午前には、55社による企業展示・説明会、また午後には、百周年記念ホールにて、第13回情報学シンポジウム「災害と情報学」が実施されるなど、この日の時計台記念館は、ICT一色の華やかな会場となった。結果として、昨年の639名を大きく上回る697名の参加者を得た。今回の ICT イノベーションでは、優秀なポスター発表を顕彰するための「優秀研究賞」を、中村佳正情報学研究科長（当時）を委員長、中島浩学術情報メディアセンター長を副委員長として、その他8名の委員からなる選考委員会において選考し、イベント後の交流会会場において表彰を行った。受賞者は以下の6名（掲載はブース番号順、所属は当時）であった。米谷竜君（知能情報学専攻）、江口佳那さん（社会情報学専攻）、朝倉僚君（学術情報メディアセンター）、井本康宏君（システム科学専攻）、花田光平君（通信情報システム専攻）、銭谷謙吾君（複雑系科学専攻）。日頃の研究活動の賜物であろうと、心よりお慶び申し上げる。

参加者に行ったアンケートによれば、今回の「京都大学 ICT イノベーション 2012」に対して、「非常に満足している」が26%、「やや満足している」が49%で、合わせて75%が有意義であるとされた。辛口のコメントとしては、「発表者に産学連携の志向が弱い」「会場が狭い」などがあつた。また、「興味を持った研究は」という質問に対して最も多い得票があつたものは、学術情報メディアセンター喜多研究室による「学習目的に応じた組み込みプログラミング教材の開発」であつた。

このように、6回目となった「京都 ICT イノベーション」は、長引く不況による産学連携マインドの冷え込みにも関わらず過去最大数の参加者を得て実施された。今後の課題としては、量的な拡張のみならず質的な充実であろうかと思う。特に多くのイベントが同時並行的に実施されているところであるが、より深く議論する場の提供により、地域産業との連携を含んだ産官学連携に対し実質的な貢献を見せること（「言うは易し」ではあろうが）が考えられる。

最後になつたが、実行ワーキンググループとして実質的に運営を行った、前田新一先生、上田真由美先生、高橋徹先生、横山順子さん（前事務局）、小川みどりさん（事務局）、林貴子さん（本研究室教務補佐員）には、昨年度開催分から大幅に予算が削減された厳しい状況において、本イベントの成功に対する多大な尽力に深く感謝申し上げる次第である。



京都大学 ICT イノベーション in Tokyo の開催報告

システム科学専攻 教授 石 井 信

2012年3月23日金曜日に、京都大学東京オフィス（品川）にて、京都大学において研究開発されている情報通信技術（ICT）を公開することで産官学連携を促進し、また、シーズとニーズのマッチングにより ICT の未来を議論することを目的とした「京都大学 ICT イノベーション in Tokyo」が、情報学研究科、学術情報メディアセンター、産官学連携本部の主催、総務省、文部科学省、経済産業省、京都府、京都市、京都商工会議所、京都大学グローバル COE プログラム「知識循環社会のための情報学教育研究拠点」の後援、京都リサーチパーク株式会社の協力の下で、開催された。

統一テーマ「未来につながる情報学」を掲げ、セッション1「未来の生活を支える通信技術」において、京都大学情報環境機構の井澤一朗教授よりは招待講演「3.11 東日本大震災の被害と情報通信（ICT）－被災地の生活の復興に向けて－」、通信情報システム専攻の山本高至准教授よりは研究講演「数万端末競合環境を実現するバッテリーレス M2M ネットワークの提案」を、セッション2「未来の科学を支える計算技術」において、理化学研究所の姫野龍太郎博士よりは招待講演「世界最速スパコン『京』で拓く生命科学の世界」、学術情報メディアセンターの岩下武史准教授よりは研究講演「次世代シミュレーションを支える HPC 技術」を、セッション3「未来の医療を支える情報技術」において、京都大学 iPS 細胞研究所の木村貴文教授よりは招待講演「iPS 細胞バンクと情報管理」、システム科学専攻の中尾恵准教授よりは研究講演「三次元画像に基づく情報生成とその臨床応用」を賜った。オープニングでは、松本紘総長より開会のご挨拶、特に ICT 関連での産官学連携について期待しているとお言葉を賜った。

クロージングでは、中村佳正情報学研究科長（当時）より、出席者への謝辞があった。また、講演会場の外では、学生 15 名によるポスター・デモ展示があり、休憩時間などで個別技術の積極的な議論がなされた。加えて、情報学研究科ミニオープンキャンパスと連続開催（開催日は3月24日土曜日）とすることで、受験を検討している関東在住の学生の参加も期待された。

この「京都大学 ICT イノベーション in Tokyo」（漢字、カタカタ、英語の組み合わせによる名前はあまり好きでないとの松本総長のコメントがあった）は、大学内百周年時計台記念館で毎年2月に実施されている「京都大学 ICT イノベーション」が好評であるとの背景から、関連イベントを東京地区で実施することで、ICT 関連部局の関東地区でのプレゼンスを高めることを一つの目的として、昨年度初めて開催されたものである。初回ということもあり手探りで進めていたところであるが、関係各位の強力なご支援を得て、京都大学外からの参加者 72 名を含む 117 名の総参加者を得て成功（会場のキャパシティは 100 名である）に終わった。また、参加者のアンケート結果も好調であり、「非常に満足している」61%、「やや満足している」が 39%、それ以外は 0% であった。フリーコメントにおいても、「内容の深い、素晴らしい講演会でした」「大変良いイベントなので、是非東京で続けて欲しい」などと好評であった。

会場のキャパシティもあり、講演会を中心とする企画となったが、京都大学 ICT 関連のシーズ、特に学際的な取り組みに関するプレゼンスは十分であったかと思う。一方で、企業からのニーズとのマッチングを図る機会は十分ではなかった。今後、類似イベントを継続実施するのであれば、

双方向的なコミュニケーションの場を提供し、産官学連携に実質的につなげるための仕組みが望ましいと思われた。

最後になったが、前田新一先生、小川みどりさん（事務局）、林貴子さん（本研究室教務補佐員）、

橋本奈緒子さん（本研究室技術補佐員）には、本イベントの成功に対する尽力に感謝申し上げます。また、中村情報学研究科長（当時）、野木情報学事務長（当時）よりには、物心ともに多大なご支援を得た。ここに深謝申し上げます次第である。



講演会場 風景



ポスター発表 風景

第3回 京都大学情報学研究科 東京ミニ・オープンキャンパス 報告

社会情報学専攻 教授 守屋和幸

情報学研究科では、一昨年より品川の京都大学東京オフィスにおいて、東京ミニ・オープンキャンパスを開催している。残念ながら、昨年（平成23年）は3月11日に発生した東日本大震災により開催中止となったため、東京での研究科全体のミニ・オープンキャンパスは実質的には2度目の開催となった。



東京ミニ・オープンキャンパスは、関東在住の学生に対する情報学研究科への

入試説明会と、学生、一般への情報学研究科の活動紹介を目的として実施されているものである。東京ミニ・オープンキャンパスの案内は関東圏の主だった情報系学部、学科をもつ大学と主要な日本語学校に送付したが、今回は、前日に開催された「京都大学 ICT イノベーション in Tokyo」と合わせた広報も行った。当日は、午前中あいにくの雨模様であったが、述べ40名の参加を得た。

当日のスケジュールは以下の通りである。

第1会場

13:30～

オープニング・全体説明

中村佳正 研究科長

Cuturi Marco 准教授 (G30 担当)

14:00～

知能情報学専攻 黒橋貞夫 教授

「知の解明と構築をめざして」

14:30～

社会情報学専攻 酒井徹朗 教授

「社会情報学専攻への誘い」

15:00～

複雑系科学専攻 船越満明 教授

「流体混合問題へのカオスの応用」

15:30～

数理工学専攻 太田快人 教授

「モデリングとアルゴリズム」

16:00～

システム科学専攻 松田哲也 教授

「サイバネティクスニューフロンティアを拓く」

16:30～

通信情報システム専攻 高木直史 教授

「快適・安全な情報社会基盤の実現に向けて」

第2会場

14:00～17:00

研究紹介コーナー

個別相談コーナー

第1会場では、中村佳正研究科長による研究科紹介および Cuturi Marco 准教授による研究科国際コース (G30 コース)



の紹介の後、各専攻の紹介が順次行われた。

第2会場では、大学院学生、教員によるポスターセッションが行われた。会場には15件のポスターが展示された。また、第2会場では京都大学情報学研究科同窓会のブースと入試等の個別相談のブースを用意した。

来場者は、第1会場での研究科および各専攻の説明に熱心に耳を傾け質問等も活発に行われた。また、第2会場でのポスターセッションでは大学院生、教員への質問や意見交換などが行われた。



平成 23 年度公開講座の開催報告

システム科学専攻 教授 杉 江 俊 治

平成 23 年 8 月 12 日（金）に総合研究 3 号館において「ここまで来た情報処理 - 画像、音声などを賢く処理する方法 ---」というタイトルを掲げ、情報学研究科公開講座を開催した。当日は中村佳正研究科長の開会の挨拶にひきつづき、当研究科の 3 名の教授から下記の講演をいただいた。

講演 1「不確かさを科学する!? - どのように役立つのか -」では 田中利幸教授（システム科学専攻）に、確率を使って不確かさを扱う情報処理が様々な問題にどう役立つのかを紹介いただいた。

講演 2「見えないものを計算機で観る」では 石井 信教授（システム科学専攻）に、画像や人間の脳内処理を対象として、見えないものを観るための方法について最新の研究成果を交えて紹介いただいた。講演 3「目で見て耳で聴くデジタルの世界」では、山本 裕教授（複雑系科学専攻）に画像や音声のデジタル処理の原理を解説いただくとともに、自動制御の理論による音質改善などを紹介いただいた。

参加者は 86 名であり、年齢的には 10 代が 37 名、40 代が 10 名と多く、60 歳以上の方も 4 名のなど幅広い層からの参加があった。アンケートをおこない 58 通回収できたのでその結果を一部紹介したい。公開講座をどのようにして知ったかについては、インターネット 27 名、知人 22 名が多く、ポスター・チラシで知ったという人は 6 名しかいなかった。講座の内容に対する感想は大変好評であった。以下にそのいくつかをしめす。

- 画像、音声における情報処理の手法について
の一端が見え、今後もう少し Web 等で調べてみたいと思います。

- 大変いい講義でした。情報処理についてよくわかりました。

- またこのような公開講座を開いてください。

高校生に情報科学の楽しさを伝えていただいた
と思っております。

- 今回はジュニアキャンパスの案内からここへ
たどり着いたのですが、せっかく京都に住みなが
ら、このような良質な講座をもっと受けたいので
開講の情報を入手したい。

- わかりやすく面白かった。来年も参加したい。

- 普段から扱っている身近なものについて原理
などを知る機会ができてよかった。

- 音質は形で判断できないということに感動した。

- 大学教授の方たちの話を聞いて、自分の勉強
への士気を高めることができた。情報処理の話
をここまで詳しく聞いたことがなかったので、と
てもおもしろかった。

当講座を企画した側としてはありがたい評価
であり、今後も研究科として公開講座を継続す
べきとの意を強くした。最後に、このような評価
の興味深い講義をいただいた 3 名の教授の方々
にはあらためて感謝したい。また、当日の準備に
際しては、研究科事務局の方々、評価・広報委員
長の守屋教授ほか、多数の方にお世話になった。
この場を借りて謝意を表したい。



南京市における「京都大学の日」部局別交流会 報告

社会情報学専攻 教授 守屋 和 幸

平成 23 (2011) 年 12 月 1 日から 4 日までの日程で開催された南京市における「京都大学の日」の行事の一環として、12 月 2 日午後、南京大学軟件学院 (Software Institute)、微電子設計研究所 (Institute of VLSI Design)、信息管理系 (Department of Information Management) との研究交流会および同大学学生への京都大学大学院情報学研究科の紹介・説明を行った。

全体のスケジュールは以下の通りである。

- 12 月 1 日 (木)
南京市へ移動
- 12 月 2 日 (金)
午前 全体行事 (於 南京大学 知行楼)
京都大学の概要紹介
南京大学の概要紹介
南京大学の概要紹介他
午後 部局交流会 (於 南京大学 費彝民楼)
研究交流会 (14:30 ~ 16:00)
京都大学大学院情報学研究科の紹介 (16:00 ~ 17:30)
- 12 月 3 日 (土)
中国校友会 (同窓会)
(於 翰苑賓館 (17:30 ~ 20:00))
終了後上海移動
- 12 月 4 日 (日) 帰国

部局間交流会について

本研究科からは守屋和幸教授、佐藤高史教授、馬強准教授、梁雪峰准教授、野木正博事務長、田中奈保子事務員 (総務担当) の 6 名が参加した。

14 時 30 分より南京大学費彝民楼にて、学術交流会を開催した。この学術交流会には南京大学からは、南京大学信息管理系・南京大学多



媒体信息処理研究所所長朱学芳教授他、軟件学院、微電子設計研究所の研究者 8 名が出席し、京都大学 3 名 (佐藤、馬、梁)、南京大学 3 名がそれぞれの研究内容の説明を行い、その後質疑・討論を行った。予定されていた時間が 1 時間 30 分と非常に限られていたが活発な意見交換がなされ、相互の交流が深まった。また、18 時より情報学研究科主催の懇親会を開催し、夕食を共にしながら更に交流を深めた。



16 時からは、場所を移して南京大学の学生に対する京都大学大学院情報学研究科の説明会ならびに留学相談会を開催した。この会には 30 名の学生が出席した。最初に守屋より研究科の紹介、国際コースの説明などを行った。次いで、馬准教授、梁准教授が中国語で補足説明ならびに学生からの質問に対する応答を行った。中国語による質疑応答だったので、多くの学生が積極的に質問を行い非常に実りのある交流が行われた。



京都大学サマーデザインスクールの開催報告

実行委員長 教授（社会情報学専攻） 石 田 亨

京都大学としては、初めての試みであるサマーデザインスクールを2011年09月27日～29日の3日間、開催した。実行委員会は、情報学研究科、工学研究科、経営管理大学院、学術情報メディアセンターの教員に加え、協力企業の研究者など約30名で構成され、大学院生を中心とする80余名の参加者が社会の実問題を扱う演習に取り組んだ。サマースクールの第1日、第2日は京都市サーチパークで行われ（図1）、参加者は課題解決のためのブレインストーミングやプロトタイプ作成を行った。第3日は、京都大学総合博物館で成果の発表会を実施した。

サマーデザインスクールでは、こうした演習を、FBL（Field Based Learning: 問題発見型学習）あるいはPBL（Problem Based Learning: 問題解決型学習）と呼んでいる。FBL/PBLを効果的に進めるために、各テーマで用いるデザイン理論やデザイン手法が参加者に示された。課題として与えられた以下のテーマは、いずれも実社会の問題を扱ったもので、事情に詳しい自治体や企業の当事者が協力者として参加した（図2）。

- ・ ホームページの外見よりも中身を整える方法
- ・ 再生可能エネルギーの社会導入と普及戦略の検討
- ・ 就活改革に向けて
- ・ 観光の情報化に関する地域モデル検討
- ・ 岡崎地域のパブリックスペースデザイン
- ・ ソーシャルメディアのデザイン
- ・ EV・ユビキタス社会における地域デザイン
- ・ 日本文化をデザインする
- ・ 伝統的寿司サービスのグローバル設計
- ・ 動物園情報サービスのインクルーシブデザイン
- ・ 起業家の創り方
- ・ 「しなやかな社会」を創る災害情報システムのデザイン
- ・ コミュニティ・ガバナンスに基づく街並み景観のデザイン
- ・ 組織における破局回避のための意思決定実践 ～福島第一原発事故を検証する～
- ・ 自転車の新機能のデザイン

近年、海外では「デザイン」を冠する大学院や研究所が数多く設立されている。ここでの「デザイン」は、グラフィックデザインやプロダクトデザインばかりではなく、社会のシステムやアーキテクチャのデザインをも含む。エネルギー問題や減災・復興など、社会の複合的な問題を解決するには多様な専門家の協働が必要である。本スクールは、高度な専門性を有する研究者や大学院生が協力して問題を解決するために、共通言語として「デザイン」を学ぶ場である。以下に示すアンケート結果から、サマーデザインスクールが参加者の大きな支持を得たことが分かる。

- ・ 内容は期待通りか：
 - 期待を超える：60.7% 期待通り：28.6%
 - 期待したほどではない：10.7%
- ・ テーマ実施2日+成果発表1日という期間はどうか：
 - 長い：0.0% 丁度良い：69.2% 短い：30.8%
- ・ テーマ活動のカリキュラムのボリュームはどうか：
 - 多かった：10.7% 適当であった：80.4%
 - 少なかった：8.9%
- ・ 専門家としての知識をテーマに反映できたか：
 - 十分反映できた：25.5% 少し反映できた：48.2%
 - 反映できなかった：26.8%
- ・ デザイン理論・デザイン手法を実践的に学べたか：
 - 十分できた：60.7%
 - それほどできなかった：37.5%
 - できなかった：1.8%
- ・ グループワークに積極的に取り組めたか：
 - 十分できた：85.7%
 - それほどできなかった：12.5%
 - できなかった：1.8%
- ・ 来年夏のサマーデザインスクールに参加するか：
 - 参加したい：78.8%
 - 参加したくない：1.9%
 - 参加できない：19.2%



図1 サマーデザインスクールの様子 (於 KRP)



Discussion



Brain Storming



Prototyping



Video Ethnography

図2 各テーマでの活動

第2回文化とコンピューティング国際会議の開催報告

実行委員会 特定講師（特別教員研究） 稲葉 利江子
 特定助教（産官学連携） 林 冬恵

世界の様々な文化的背景を持つ問題の解決には、インターネットを初めとする情報技術が必要不可欠であり、日本のイニシアティブは極めて重要である。こうした認識から、2010年2月に、情報学研究科主催の情報学シンポジウムを核として、文化とコンピューティングに関わる問題意識や研究成果を共有し将来を展望するため、第1回文化とコンピューティング国際会議が開催された。この会議では、大学、学会、NPOなど様々な実行主体による10を超えるイベントが行われ約500名が参加し活況を呈した。

情報学研究科から生まれたこの活動を、永続性のある本格的な会議に成長させるべく、第2回の国際会議では、第一線の研究者から成るプログラム委員会を構成した。この分野の核となる会議とすることを目指し、情報学研究科が共催し、京都大学時計台記念館で2011年10月20～22日に開催した。

本会議では、Main Trackでの28件の論文発表の他、コンピューティングと人文科学諸分野との接点となる“Digital Humanities”とアジア文化とメディア芸術の融合を目指す“Asian Culture based Media Art”という2つのSpecial Trackを設けた。その結果、情報学のみならず、人文社会科学、芸術学など幅広い分野の研究者による発表が行われ、様々な視点からの熱心な議論が交わされた。参加者は25ヶ国から104名が集まり、その論文集はIEEEより出版した。

基調講演には、オープンコースウェア（OCW）の中心人物であるMITの宮川繁教授を迎えた。MITで展開されているOCWの取り組みおよび、歴史的な事件・事項に関して異なる文化圏で描かれた画像を比較研究したVisualizing Culturesについて講演が行われた。また招待講演には、博物館や美術館における対話的な没入体験の研究



宮川繁教授（MIT）の基調講演

で活躍しているSarah Kenderdine博士を迎えた。博士はこれまで、幅広い展示作品を通じて歴史的な文化財と近代的メディアアートを融合させてきた。香港城市大学に新設されたApplied Laboratory for Interactive Visualization and Embodiment（ALiVE）で研究開発されているインタラクティブ性の高い没入型文化遺産展示システムの紹介が行われた。

会議の併設イベントでは、文化とコンピューティングに関係したエキシビション「アートフェア」が開催され、京都の伝統工芸、現代アート、ITコンテンツなどの展示が多数行われた。さらに、学会、NPO、研究グループの協催イベントも開催された。時計台記念館で行われたこれらのイベントには、多くの参加者が訪れ、国際会議参加者と共にレセプションで交流が行われた。

本会議のClosing Panelでは、文化とコンピューティングに関わる多分野の研究者が集まる機会は貴重であるとの意見が多く、京都で会議を維持し、隔年開催することとなった。また、京都で会議が行われない年には、提案があれば海外で会議を行うこととなった。その結果、2012年には、10月21～24日に中国・杭州で第3回の会議を開催することとなった。

同窓会イベント「超交流会 2011」報告

京都大学大学院情報学研究科 同窓会会長 今村元一
(社会情報学専攻 2000年修了)
(株式会社クエストレ CEO)

1. 卒業生・在校生の役に立つ同窓会!

正会員(卒業生等)や準会員(在校生)にとって、真に「役に立つ同窓会」とは何か?

京都大学大学院情報学研究科同窓会は2008年以降、紙媒体による情報発信(会報発行等)を中心とする活動から、会員の人脈形成に貢献するイベント主催活動にシフトしています。本稿では、最重要活動と位置付けている、ネットワーキングイベント『超交流会』について報告します。

2. 超交流会 2011 の実施概要

『超交流会』として3回目を迎えた「超交流会 2011」は、2011年5月29日に、京都大学百周年記念館(時計台)にて開催されました。

『超交流会』の最大の特徴は、「参加資格に制限をもうけないオープンなイベント」であることです。この特徴について、一時期は賛否様々なコメントを頂きましたが、今に至っては「京大情報学のOB達がお届けするお祭りイベント」へと昇華され、会員の人脈形成に大きく貢献していると考えています。

「超交流会 2011」も、Twitter や Facebook 等での「口コミ」で認知度が高まり、462名の事前登録を頂きました。

<超交流会 2011 の概要>

テーマ： みんなのセカイ進出
日時： 2011年5月29日(日) 10:00 ~ 18:00
場所： 京都大学百周年記念館
主催： 京大情報学同窓会
共催： 京都大学大学院情報学研究科
後援： 京都商工会議所、NICT
参加費： 会員 2000円、学生 2000円、
一般 4000円

ホームページ：

<http://www.johogaku.net/sn2011>

<主な登壇者(敬称略)>

- 中村佳正：京大情報学研究科研究科長
- 長尾真：国立国会図書館館長・元京大総長
- ブラッドエリス：グーグルプロダクトマネージャ
- 近藤淳也：はてな代表取締役社長
- 濱口秀司：Ziba 戦略ディレクター
- 西田隆一：AOL オンラインジャパン
- 小林弘人：インフォバーン代表取締役
- 森正弥：楽天執行役員
- 佐藤光紀：セプテーニ・ホールディングス代表取締役



<御講演「情報学の学生よ、挑戦せよ」の様子>



<パラレルセッションの様子>

3. 超交流会 2011 の開催結果

「超交流会 2011」は、3月11日の東日本大震災の影響により、各登壇者との企画調整が大幅に遅れました。周知宣伝活動が1か月前から(前年は3か月前から)の実施となり、事前申込数も結果として「462名」と前年の559名から減少しました。

またイベント当日には台風2号が最接近し、開催そのものも危ぶまれる事態となりました。しかし、その様な状況にあっても、368名もの方に御来場いただくことができました。イベント直後から、「ブログ」や「つぶやき」を通じて多数のフィードバックを頂きました。以下に概況をまとめます。なお詳細な活動記録はこちらの URL から確認できます。

<http://www.johogaku.net/sn2011/archives>

<参加者の声>

- 参加して大成功。楽しい！！
- とても素敵な会、実現は簡単ではないはず
- 最高にテンションあがりっぱなしの一日でした
- 本当に各界(?) 著名人が集まる素晴らしい会合
- 元総長のお話は面白く最後までみっちり聞きました
- 和太鼓グループの生演奏、無茶苦茶よかったです
- イノベーションの作法は、現場経験に説得力が！
- 2012年5月26日、もはやスケジューラーに入れた



<超交流会 2011 参加実績>

情報学卒業生：	25名 (65名)
情報学在校生：	43名 (48名)
学生(情報学以外)：	85名 (125名)
一般社会人：	178名 (321名)
登壇者・ボランティア：	37名

※カッコ内は「超交流会 2010 登録実績」

<超交流会過去3回の比較>

	2009	2010	2011
事前登録数	229名	559名	462名
当日来場数			368名
(参加費)	(516千円)	(1,272千円)	(1,058千円)
(スピーチ)	(25名)	(33名)	(21名)
有料出展数	0社	13社	24社
(出展料)	(0円)	(500千円)	(1,340千円)
(無料出展)	(8社)	(12社)	(5社)
収入総計	832千円	2,162千円	2,744千円
支出総計	1,120千円	2,472千円	1,612千円
収支	▲288千円	▲310千円	1,132千円

<超交流会 2011 の収支詳細>

収入：	出展者出展料	1,340千円
	参加者参加費	1,058千円
	研究科支援(会場費)	276千円
	寄付等	70千円
支出：	会場費会場設営費	731千円
	謝金交通費	420千円
	会食費	300千円
	その他経費	160千円

4. 超交流会の課題

我々同窓会幹事は、多くの高校に『文化祭』がある様に、多くの大学に『学園祭』がある様に、

多くの同窓会に『超交流会』があれば良いと思っています。すなわち、他の同窓会が真似したくなるような仕組み、そして長く継続開催できる仕組みを構築して行きたいと考えています。

「アカデミックな情報発信の場としても活用される様にする」、「ボランティアスタッフの負担を軽減する」などの具体的な課題やリクエストと向き合いながら、イベント企画の仕組みを少しずつ改善して行きます。

5. 今後の超交流会

日常にあっては、閉ざされた人間関係の中だけで生きてしまいがちです。しかし、何かの縁でその人間関係を広げる事ができれば、それは転じて「自分の可能性」を広げる事につながるはずです。

「超交流会 2012」は、(本稿が公開される頃には終わっていますが)、2012年5月26日(土曜日)に開催される予定です。さらに、「超交流会 2013」は2013年6月1日(土曜日)に開催される見込みです。是非、知人友人をお誘いの上で気軽に参加して下さい。

<情報発信>

Web サイト (一般向け) :

<http://www.johogaku.net/>

Facebook ページ (一般向け) :

<https://www.facebook.com/SuperNetworking>

Facebook グループ (会員向け) :

<https://www.facebook.com/groups/johogaku/>

招へい外国人学者等

氏名・国籍・所属・職	活 動 内 容	受入期間・身分	受 入 教 員
MEHBODNIYA Abolfazl イラン 東北大学大学院 工学研究科 外国人特別研究員	無線通信技術に関する京都大学との共同研究	外国人共同研究者 2011.04.28 ~ 2011.06.30	通信情報システム専攻 吉田 進 教授
CAPKOVIC Frantisek スロバキア スロバキア科学アカデミー Institute of Informatics 准教授	人工知能への工学的アプローチ	外国人共同研究者 2011.05.10 ~ 2011.06.07	知能情報学専攻 西田 豊明 教授
ANPALAGAN Alagan カナダ ライオンソン大学電気情報工学科 教授	次世代無線通信技術に関する研究	招へい外国人学者 2011.07.04 ~ 2011.07.30	通信情報システム専攻 吉田 進 教授
MORAN Stuart Paul イギリス レディング大学 研究システム開発者	自律エージェントに対するユーザの行動学的反応の予測	外国人共同研究者 2011.07.10 ~ 2012.01.09	知能情報学専攻 西田 豊明 教授
MOHAMMAD Yasser Farouk Othman エジプト アシュート大学 助教	準教師付学習アルゴリズムの開発	外国人共同研究者 2011.07.29 ~ 2011.12.29	知能情報学専攻 西田 豊明 教授
FUKUDA Ellen Hidemi ブラジル State University of Campinas Postdoctoral researcher	非線形最適化のアルゴリズムに関する研究	外国人共同研究者 2011.08.09 ~ 2012.02.09	数理工学専攻 福嶋 雅夫 教授
ROGIEST Wouter ベルギー ゲント大学 ポスドク研究員	情報ネットワークのモデル化と性能解析	外国人共同研究者 2011.09.27 ~ 2011.12.23	システム科学専攻 高橋 豊 教授
VALLVERDU-SEGURA Jordi スペイン バルセロナ自治大学 哲学科 教授	よりよい人間ロボットインタラクションのための主観模倣理論	招へい外国人学者 2011.10.15 ~ 2011.11.15	知能情報学専攻 西田 豊明 教授
SEAH Khoo Guan シンガポール Victoria University of Wellington 教授	無線マルチホップネットワークに関する研究	外国人共同研究者 2011.12.04 ~ 2011.12.24	システム科学専攻 高橋 豊 教授
CHEN Ning 中国 ナンヤン工科大学 数理科学部 助教授	電子通商システムの理論的研究	招へい外国人学者 2011.12.15 ~ 2011.12.30	通信情報システム専攻 岩間 一雄 教授
JÚDICE Joaquim João ポルトガル Universidade de Coimbra Departamento de Matematica 教授	固有値相補性問題に関する研究	招へい外国人学者 2012.1.22 ~ 2012.2.4	数理工学専攻 福嶋 雅夫 教授

平成23年度 受託研究

受託研究題目	研究代表者所属・職・氏名	委託者
認知発達の脳内メカニズムの解明	知能情報学専攻 教授 乾 敏郎	独立行政法人 科学技術振興機構
ヒューマノイドロボットのための能動的両耳聴	知能情報学専攻 教授 奥乃 博	独立行政法人 科学技術振興機構
「ユーザ中心のサービス設計」および「ボランティア経済に基づく制度設計」	社会情報学専攻 教授 石田 亨	独立行政法人 科学技術振興機構
単一磁束量子回路による再構成可能な低電力高性能プロセッサ	通信情報システム専攻 教授 高木 直史	独立行政法人 科学技術振興機構
超伝導回路設計用 CAD の開発	通信情報システム専攻 教授 高木 直史	独立行政法人 科学技術振興機構
ディペンダブル VLSI プラットフォーム用ロバストファブリックとマッピング技術の研究	通信情報システム専攻 教授 小野寺秀俊	独立行政法人 科学技術振興機構
長期インタラクション創発を可能とする知能化空間の設計論	知能情報学専攻 准教授 尾形 哲也	独立行政法人 科学技術振興機構
スーパーコンピューティングのための型システム	知能情報学専攻 准教授 五十嵐 淳	独立行政法人 科学技術振興機構
ネットワーク結合力学系のモデル化と解析に基づく機能発現メカニズムの解明	複雑系科学専攻 准教授 青柳富誌生	独立行政法人 科学技術振興機構
仮説世界と物理世界の相互浸透モデリングによる知の創生	システム科学専攻 講師 大羽 成征	独立行政法人 科学技術振興機構
音響技術を用いた水中における高精度測位システムの開発	社会情報学専攻 助 授 三田村啓理	独立行政法人 科学技術振興機構
集合記憶の分析および歴史文書からの知識抽出手法の開発	社会情報学専攻 特定准教授 Adam Jatowt	独立行政法人 科学技術振興機構
Web インタラクションを中心とした類似度可視化情報環境の実現	社会情報学専攻 特定准教授 中村 聡史	独立行政法人 科学技術振興機構
次世代生命体統合シミュレーションソフトウェアの研究開発	システム科学専攻 教授 石井 信	文部科学省
「情動の制御機構を解明するための神経情報基盤の構築」(情動系神経情報基盤構築のための計算論的手法および動物実験の開発)	システム科学専攻 教授 石井 信	文部科学省
平成 23 年度希少水生生物保全委託事業	社会情報学専攻 准教授 荒井 修亮	独立行政法人 水産総合研究センター
クロマグロ幼魚複数個体の高精度の位置データ取得	社会情報学専攻 助 授 三田村啓理	独立行政法人 水産総合研究センター

受託研究題目	研究代表者所属・職・氏名	委託者
サービスコンピューティングに基づく多言語サービス基盤の実現	社会情報学専攻 教授 石田 亨	総務省
コヒーレント CoMP による無線分散ネットワークの研究開発	通信情報システム専攻 教授 吉田 進	総務省
「新世代ネットワークを支えるネットワーク仮想化基盤技術の研究開発」新世代ネットワークアプリケーションの研究開発	通信情報システム専攻 准教授 新熊 亮一	独立行政法人 情報通信研究機構
「新世代ネットワークを支えるネットワーク仮想化基盤技術の研究開発」新世代ネットワークアプリケーションの研究開発	通信情報システム専攻 准教授 新熊 亮一	国立大学法人神戸大学 【独立行政法人情報通信研究機構「新世代ネットワークアプリケーションの研究開発」再委託】
情報学および総合領域に関する学術研究動向調査研究及び科研費分科細目の改正に係るフォローアップ	知能情報学専攻 教授 西田 豊明	独立行政法人 日本学術振興会
エネルギーの情報化技術の研究開発	知能情報学専攻 教授 松山 隆司	日本電気株式会社 システムプラットフォーム研究所
消費電力の見える化・オンデマンド型エネルギー制御の研究	知能情報学専攻 教授 松山 隆司	株式会社富士通研究所 ヒューマンセントリックコンピューティング研究所
スマートハウスの運転計画のロバスト最適化アルゴリズムに関する研究	数理工学専攻 教授 福嶋 雅夫	東邦ガス株式会社
地球環境情報統融合プログラム	社会情報学専攻 教授 吉川 正俊	国立大学法人東京大学 生産技術研究所
超低電圧 LSI プラットフォーム開発および超低電圧システム開発	通信情報システム専攻 教授 小野寺秀俊	超低電圧デバイス技術研究組合

平成23年度 共同研究

研究題目等	研究代表者所属・職・氏名	委託者
日中・中日用例ベース機械翻訳の高度化・実用化のための開発研究	知能情報学専攻 教授 黒橋 禎夫	ヤフー株式会社
実環境理解、ロボット聴覚、及び人・ロボットインタラクションに関する研究	知能情報学専攻 教授 奥乃 博	株式会社ホンダ・リサーチ・インスティテュート・ジャパン
電力使用量の削減と QOL の維持を両立する電力制御システムの開発	知能情報学専攻 教授 松山 隆司	株式会社構造計画研究所
社会認知神経科学の展開	知能情報学専攻 教授 乾 敏郎	株式会社コンポン研究所
Web コンテンツに対する時空間情報処理技術に関する研究	社会情報学専攻 教授 田中 克己	株式会社デンソーアイティ ラボラトリ
クラウド翻訳の研究	社会情報学専攻 教授 石田 亨	株式会社石田大成社
スマートグリッド向け無線ネットワークにおけるトラフィック制御技術に関する研究	システム科学専攻 教授 高橋 豊	株式会社日立製作所 横浜研究所
超解像技術に関する研究	システム科学専攻 教授 石井 信	株式会社デンソー
品質推定機能の開発	システム科学専攻 教授 加納 学	三菱化学エンジニアリング株式会社
高圧地絡電流・電圧波形の要因分析	システム科学専攻 教授 加納 学	財団法人関西電気保安協会
多変量モデルを用いたプロセス状態予測	システム科学専攻 教授 加納 学	株式会社東芝 生産技術センター 品質技術研究センター
統計的プロセス管理技術に基づく高炉操業支援モデルの開発	システム科学専攻 教授 加納 学	新日本製鐵株式会社 技術開発本部 環境・プロセス研究開発センター
半導体プロセス向け仮想測定の基本検討	システム科学専攻 教授 加納 学	ソニーセミコンダクタ九州株式会社
統合的リアルタイムモニタリングシステム(RTRT)	システム科学専攻 教授 加納 学	第一三共株式会社
確率的アルゴリズムによる高効率回路解析の研究	通信情報システム専攻 教授 佐藤 高史	株式会社半導体理工学研究センター
車載 PLC の検討	通信情報システム専攻 教授 守倉 正博	株式会社オートネットワーク 技術研究所
連携送受信信号処理技術と適応リソース制御技術	通信情報システム専攻 教授 吉田 進	株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ

研究題目等	研究代表者所属・職・氏名	委託者
LSIの多レポート電源モデルの研究	通信情報システム専攻 教授 佐藤 高史	株式会社村田製作所
人間とロボットの協調作業における音声インタラクションの創発に関する研究	知能情報学専攻 准教授 尾形 哲也	独立行政法人 理化学研究所
マイクログリッドシステムにおける最適制御方式の研究	複雑系科学専攻 教授 山本 裕	パナソニック株式会社 産学連携推進センター
交通分野における数理計画手法の応用	数理工学専攻 教授 福嶋 雅夫	パナソニック SS インフラシステム株式会社
LTE - Advanced / Beyond 4G 向け干渉制御技術に関する研究	通信情報システム専攻 教授 吉田 進	パナソニック株式会社 東京 R & D センター 次世代モバイル開発センター
次世代ミリ波イメージングレーダ技術に関する研究	通信情報システム専攻 教授 佐藤 亨	パナソニック株式会社 先端技術研究所
ソーシャルグラフを活用したリコメンデーションの研究	通信情報システム専攻 准教授 新熊 亮一	パナソニック株式会社 AVC ネットワークス社技術統括センター AVC ネットワーク開発センター
ネット広告のリアルタイム入札環境における売買方法の最適化	社会情報学専攻 准教授 松原 繁夫	株式会社マイクロアド
金融市場とのアナロジーを用いた広告オークション市場の入札価格決定方法	数理工学専攻 助教 佐藤 彰洋	株式会社マイクロアド
グラフ的・論理的対象への離散構造処理系アプローチ	知能情報学専攻 教授 山本 章博	独立行政法人 科学技術振興機構
グラフ的・論理的対象への離散構造処理系アプローチ	通信情報システム専攻 准教授 伊藤 大雄	独立行政法人 科学技術振興機構
文脈情報を用いた情報抽出技術に関する研究開発	知能情報学専攻 教授 黒橋 禎夫	日本電気株式会社 情報・メディアプロセッシング研究所
超大容量光信号伝送のためのデジタル信号処理方式の研究	システム科学専攻 准教授 林 和則	日本電気株式会社 システムプラットフォーム研究所
社会行動メカニズム解明のための実証実験および学術調査	通信情報システム専攻 准教授 新熊 亮一	日本電気株式会社 C & C イノベーション研究所
次世代検索のための言語解析および言語推論の研究	知能情報学専攻 教授 黒橋 禎夫	日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所
可変ズーム映像を用いた高精細自由視点映像生成	知能情報学専攻 教授 松山 隆司	日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所
大規模データベースにおける高速学習技術に関する研究	社会情報学専攻 教授 吉川 正俊	日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所
ソフトセンサの変数選択手法の開発	システム科学専攻 教授 加納 学	日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所

研究題目等	研究代表者所属・職・氏名	委託者
誘導性結合インダクタを用いたCMOS光/電気インターフェース回路の研究	通信情報システム専攻 教授 小野寺秀俊	日本電信電話株式会社 フォトニクス研究所
宅内向けマルチホップ無線システムの研究	通信情報システム専攻 教授 守倉 正博	日本電信電話株式会社 アクセスサービスシステム研究所
ユーザ協調型ネットワークアーキテクチャの実現に向けたインセンティブメカニズムに関する研究	通信情報システム専攻 教授 高橋 達郎	日本電信電話株式会社 サービスインテグレーション 基盤研究所
広域同期型光 TS 交換網の制御方式の研究	通信情報システム専攻 教授 高橋 達郎	日本電信電話株式会社 NTT ネットワークサービスシステム研究所
ネットワーク制御によるチャンネル選択に関する研究	通信情報システム専攻 准教授 山本 高至	日本電信電話株式会社 未来ねっと研究所

平成23年度 科学研究費補助金

研究種目	審査区分	研究代表者	研 究 課 題
基盤研究 (S)		西田 豊明	会話エージェント研究共有プラットフォームの構築と利用技術の研究
		奥乃 博	音環境理解研究からのロボット聴覚の構築
		乾 敏郎	身体図式を基礎とした動的イメージ生成の脳内メカニズムの解明
基盤研究 (A)	一 般	中村 佳正	マルチコアプロセッサに対応した革新的特異値分解ライブラリーの開発
	一 般	吉田 進	自律分散制御無線情報ネットワークとその展開に関する研究
	一 般	石田 亨	サービスコンピューティングに基づく集合知の研究
	一 般	佐藤 亨	少数アンテナを用いた UWB レーダー高次イメージング手法の開発
	一 般	岩間 一雄	空間的な情報補填を可能にするアルゴリズムの研究
	一 般	山本 章博	離散値・数値混用データからの閉集合を利用した知識発見方式
	一 般	矢田 哲士	プロモーター配列の設計
基盤研究 (B)	一 般	吉川 正俊	Web 上の知識資源の統合利用基盤技術に関する研究
	一 般	八杉 昌宏	安全な計算状態操作機構の実用化
	一 般	尾形 哲也	ロボットの能動知覚に基づく物体挙動予測モデルと道具使用
	一 般	石井 信	あいまいで変動する環境におけるモジュール型意思決定モデルの研究
	一 般	松田 哲也	MRI を用いた生体組織における各種物理特性の異方性に関する検討
	一 般	守倉 正博	無線ネットワークコーディングの研究
	一 般	川上 浩司	不便の効用を活用したシステム論の展開
	一 般	杉江 俊治	超解像制御とソフトスペック制御 - 超低解像度信号による高機能システムの実現 -
	一 般	山本 裕	サンプル値制御理論によるハイブリッド信号処理の研究
	一 般	佐藤 雅彦	バグのないソフトウェア構築環境に関する研究の新展開
	一 般	小野寺秀俊	低電圧安定動作を実現する集積回路ハードウェア設計技術
	一 般	松原 繁夫	クラウドソーシング型問題解決メカニズムの研究
	一 般	後藤 修	大量シークエンシング時代に向けた新規配列比較法の開発
	一 般	磯 祐介	無限多倍長数値計算環境における数値解析学と数値計算手法の新しい展開
	一 般	佐藤 高史	モンテカルロ法にもとづくタイミング解析高速化の研究
	一 般	高橋 豊	ネットワーク・ウェア・サービス指向型システム構成論に関する研究
	一 般	越智 裕之	大規模恒久保存基盤システムの構成方式の検討
	一 般	木上 淳	フラクタルの内的構造を巡る数学の諸分野の相互作用
	海 外	荒井 修亮	バイオリギングによるタイ国シリキットダム湖におけるメコンオオナマズの生態解明
	基盤研究 (C)	一 般	宮崎 修次
一 般		山下 信雄	正定値行列補完を用いた準ニュートン法の実用化に関する研究
一 般		伊藤 大雄	巨大情報からの超高速情報抽出アルゴリズムの研究
一 般		田中 泰明	リスク証券化の社会的影響分析と工学的見地からの最適管理方策
一 般		笠原 正治	高品質サービス保証型オーバーレイネットワークの設計・制御・構成法
一 般		福嶋 雅夫	相補性とそれに関連する諸問題に対する手法
一 般		細川 浩	シナプス形成・維持における基底膜による分子集積の解析
一 般		辻本 論	双直交関数系および離散・超離散可積分系の研究とその応用
一 般		岩井 敏洋	幾何学的力学系理論の応用と展開
一 般		船越 満明	熱対流の発生とそれに伴うカオス混合に関する数理的研究
一 般		西原 修	電気自動車におけるスリップ率最小化トルク配分とエネルギー節減効果
一 般		乗松 誠司	光振幅位相変調方式に対する自己/相互位相変調効果の高速評価法に関する研究
一 般		高橋 達郎	機会的無線アクセスをサポートする学習し進化するネットワークアーキテクチャ
一 般		田中 利幸	通信路分極の数理と応用に関する基礎的検討
一 般		永持 仁	ネットワーク構造への変換に基づくアルゴリズム設計技術

研究種目	審査区分	研究代表者	研 究 課 題
基盤研究 (C)	一 般	原田 健自	テンソルネットワーク変分法を用いた量子フラストレーション系の数値的研究
	一 般	金子 豊	シリコン貫通電極作成のためのマルチスケールシミュレーションシステムの開発と応用
	一 般	西村 直志	Maxwell 方程式の周期多重極法における前処理法と基底関数に関する研究
	一 般	山口 義幸	非相加系のダイナミクスと熱力学
	一 般	太田 快人	構造を有するシステム同定問題へのロバスト制御理論からの取り組み
	一 般	藤岡 久也	非周期的サンプル値制御系の最適設計
挑戦的萌芽研究		中村 聡史	モバイル協調検索に関する研究
		西田 豊明	状況・イメージ・言語を統合したコミュニケーション自律学習メカニズム
		山本 章博	主観信頼性とグラフィカル・モデルの組合せによる研究支援システムの構築
		山本 裕	制御理論による数値解析学の研究
		八杉 昌宏	汎用性に優れた型付中間言語
		田島 敬史	木構造データの複数パラダイム混在処理方式に関する研究
		奥乃 博	カエルの合唱モデルを用いた人と合奏協調する音楽共演者ロボット
		中村 佳正	正值性をもつ数値計算法による相対誤差への挑戦
		磯 祐介	応用逆問題におけるモデル化誤差の評価とその正則化
		杉江 俊治	不完全観測情報に基づく制御系設計
新学術領域研究 (研究領域提案型)		水原 啓暁	脳内回路の引き込み協調による言語・非言語コミュニケーションの創発原理の解明
		石井 信	多次元データに基づくメゾ回路のシステム同定法の開発
		青柳富誌生	複数のリズムが絡んだ局所神経回路の解析と機能的意味の検証
		行縄 直人	シミュレーションを援用したシグナル伝達系による動的細胞形態制御の解析技術の開発
研 究 活 動 スタート支援		Avis David	幾何計算のためのソフトウェア開発：理論的基礎、実装とその応用
		上野 賢哉	論理式の構造的複雑さ解明
		脊戸 和寿	証明の複雑さにおけるグラフ理論的手法の構築
若手研究 (A)		西出 俊	神経回路モデルによるロボットの発達のな物体知覚機構の構築と動作生成
		五十嵐 淳	静的・動的型付けの融合による安全かつ柔軟なプログラミング言語の理論と設計
		水原 啓暁	マルチスケールな神経振動子協調による脳内情報統合メカニズムの解明
		三田村啓理	情報通信技術を応用した沿岸性魚類の固執・回帰メカニズムの解明
		前川 真吾	セロトニンの体軸形成過程における役割
		中村 聡史	インタラクティブな再ランキング・再サーチを可能とする次世代検索に関する研究
若手研究 (B)		河原 大輔	言語使用の大規模観察に基づく言語知識獲得と言語解析の共深化
		中尾 恵	三次元医用画像における構造・力学特性の統合表現法の開発
		福永 拓郎	汎用的なネットワーク設計問題に対するアルゴリズムの研究
		大関 真之	繰り込み群と双対変換による多重臨界点の正確な位置の予言
		中澤 巧爾	二階存在量子をもつ計算体系
		馬谷 誠二	高級な通信・移動機能を備えた実用的アンビエント計算言語
		服部 宏充	大規模交通シミュレーションのための人間行動モデリングの研究
		柴田 知秀	大規模テキストから自動獲得した知識に基づく言語解析の精度向上
		高橋 徹	アクティブオーディションによるロボット聴覚機能の向上
		笹岡 貴史	三次元物体認知における身体性および行為知識の役割の解明
		増山 博之	待ち行列モデルと保険リスク評価モデルにおける希少事象確率の理論的評価
		久保 雅義	応用科学における逆問題の数学解析と情報理論の適用
		日野 正訓	複雑な空間構造の解明に適した確率解析の理論展開
		大久保 潤	物性理論的方法による古典確率過程の解析手法の開発と応用
	平岡 敏洋	ドライバの認知的・身体的特性に基づく間接型運転支援システムに関する研究	
	新熊 亮一	複雑な無線環境における学習を用いた周波数資源制御技術の研究	
	林 和則	周波数領域等化ブロック伝送方式を用いた1セル繰り返し移動体通信システムの研究	

研究種目	審査区分	研究代表者	研 究 課 題
若手研究(B)		阪本 卓也	UWB アレイレーダによる人体立体形状のリアルタイムイメージング技術
		Adam Jatowt	時間指向ウェブ検索およびウェブマイニング
		清水 敏之	半構造データに対する付加情報の管理と検索への利用
		前田 新一	大規模データに適用可能なマルコフ確率場の学習アルゴリズムに関する研究
		奥山 隼一	行動情報に基づく、絶滅危惧種ウミガメ類の混獲危険性評価手法の確立
		上岡 修平	離散可積分系による非衝突ランダムウォーク系の分配関数の計算
		林 俊介	錐制約付き半無限計画問題のフィルタ設計および DSM 通信に対する応用
		永原 正章	サンプル値制御理論にもとづく無限次元コントローラの最適離散化
		楢崎美智子	マウス腫瘍における 19 F MRS/MRI を用いたフッ素糖代謝研究
		玉置 卓	計算困難問題に対する厳密指数時間アルゴリズムの研究
		趙 亮	大規模時間依存最短路問題に対する高速アルゴリズムの研究
		浅野 泰仁	集合知とウェブ知識の有機的循環化技術の開発
		中島 悠	マルチモデルに基づく都市シミュレーションプラットフォーム
		Cuturi Marco	カーネル法に基づく複雑な時系列の分析手法の開発
		延原 章平	時空間的制約による誤り検出・訂正を備えた時系列3次元形状・多視点領域の同時推定
		藤原 宏志	正則化法による逆問題の高精度近似理論と次世代計算環境による数値的实现
		佐藤 彰洋	エージェント集団行動の大規模同期現象のモデルと推計
		山本 高至	ゲーム理論を応用したヘテロジニアス無線ネットワークのための自己組織化適応制御
		金子めぐみ	フェムトセル・マクロセル共存環境での無線資源割当てに関する研究
		山肩 洋子	調理をしながら調理法を説明した音声からのレシピテキストの自動生成
	吉仲 亮	語句の分布情報を利用する形式言語学習理論に基づく実用的アルゴリズムの研究	
特別研究員 奨励費		松山 隆司 (Zhaozheng Hu)	能動カメラ群による映像監視システムの研究
		木村 里子	揚子江に生息するスナメリの個体群動態とその変動要因の解明に関する研究
		關戸 啓人	カノニカルモーメントと離散可積分系を用いた D-optimal design の構成
		川本 淳平	アウトソーシングデータベースにおける情報漏洩防止を保證する技術の研究
		平山淳一郎	変動環境における脳内情報処理のベイズ学習モデル
		原島 純	検索エンジンが返す検索結果中の各文書を情報源としたクエリに関する要約文の生成
		太田絵一郎	生命系における同期ダイナミクス解析のための実験的手法の開発
		寺村 佳子	計算論的アプローチによる音楽認知メカニズムの解明
		山本 岳洋	ユーザインタラクションに基づく情報検索に関する研究
		久保 広行	オーバレイネットワークによるモバイルマルチキャスト基盤アーキテクチャの研究
		フドクトゥアン	再試行型複数サーバ待ち行列の解析と情報ネットワークへの応用
		横田 健治	ルータにおけるパケットスケジューリング方式の研究
		松原 靖子	大規模分布データストリームのためのモデル推定
		三木 啓司	歪直交多項式のスペクトル変形理論の構築による離散可積分系の導出とその応用
		加藤 誠	アナロジーに基づく情報検索に関する研究
		杉山 磨人	アルゴリズムによって正当性を保證する知識発見手法の構築
		森 立平	通信路分極現象に基づいた誤り訂正符号とその復号法
		伊奈林太郎	表現力が高く安全に相互運用可能なプログラミング言語の理論と実現
		多羅間大輔	力学系理論と代数的・複素解析的幾何学の相互連関的研究
		野田 琢嗣	深海性魚類の行動モニタリング手法の確立およびマダラの産卵行動に関する研究
		今川 隆司	再構成可能アーキテクチャを活用した LSI システム設計方法論
		末永 幸平	並行プログラムのための型理論に基づく利便性の高い静的検証手法
		岩渕 俊樹	身体化による言語理解に関する神経基盤の解明
	前田 一貴	減算のない非自励離散可積分系が創出する新たな箱玉系と数値計算アルゴリズムの研究	
	和田 尚樹	グラフ上の逆問題に対する境界制御法を用いた解析手法について	

研究種目	審査区分	研究代表者	研 究 課 題
特 別 研 究 員 奨 励 費		新納 和樹	周期領域における Maxwell 方程式の形状最適化問題の数値解法
		水本 武志	人とロボットの音楽インタラクションのための非線形モデルに基づく同期演奏技術の開発
		大塚 琢馬	共演者音楽ロボット実現のための音響信号に基づく音楽インタラクション手法の開発

平成23年度 特別講演

番号	開催日	曜日	主催	講師	講演題目
1	4月15日	金	知能情報学専攻	関西学院大学大学院 文学研究科 博士研究員 福井隆雄	運動制御と行為知覚
2	4月15日	金	知能情報学専攻	九州工業大学大学院 生命体工学研究科 准教授 我妻広明	実世界における計算論的神経科学の有効性の探求 - 脳型ロボット開発に見る脳科学と工学の接点 -
3	4月30日	土	複雑系科学専攻	九州大学大学院工学研究院 エネルギー量子工学部門・応用物理学講座 助教 日高芳樹	大偏差統計とその周辺
4	5月25日	水	システム科学専攻	University College London 研究員 吉田和子	Cooperation, belief inference and autistic mind
5	6月8日	水	知能情報学専攻	ATR 脳情報研究所 計算神経生物学研究室 室長 銅谷賢治	ラットの行動学習過程の数理モデル化と大脳基底核の神経活動解析・気長さの制御とセロトニンニューロンの活動
6	6月15日	水	知能情報学専攻	University of British Columbia Department of Computer Science Associate Professor Arnaud Doucet	A short introduction to Particle Markov Chain Monte Carlo methods
7	6月27日	月	知能情報学専攻	九州大学大学院 人間環境学研究院 人間科学部門 教授 箱田裕司	非対称的混同効果について - 領域固有性・一般性の視点から -
8	7月6日	水	知能情報学専攻	独立行政法人理化学研究所 チームリーダー 角田達彦	全ゲノム解析による疾患関連遺伝子研究の爆発的進展
9	7月6日	水	知能情報学専攻	大阪大学大学院 情報科学研究科 マルチメディア工学専攻 教授 細田 耕	「ソフトロボティクス」について
10	7月7日	木	知能情報学専攻	東京大学大学院 新領域創成科学研究科 複雑理工学専攻 教授 岡田真人	「大規模データ解析による視覚パターン認識機構の研究」について
11	7月29日	金	通信情報システム専攻	イリノイ大学 アーバナ・シャンペーン校 電気情報工学科 教授、統合科学研究所 研究教授 Naresh R. Shanbhag	A Communications-inspired SOC Design Paradigm for the Nanoscale and Post-Silicon Era (通信理論に触発されたナノスケールおよびポストシリコン時代のSoC設計パラダイム)
12	8月3日	水	知能情報学専攻	University of California Berkeley EECS and IEOR Departments Professor Laurent El Ghauai	Spare Machine Learning Approaches to study text corpora
13	8月22日	月	知能情報学専攻	独立法人 情報通信研究機構 研究所長 今水 寛	「認知機構の研究」について
14	9月1日	木	知能情報学専攻	独立法人 産業技術総合研究所 研究グループ長 熊田孝恒	「加齢や脳損傷による認知機能低下と日常生活行動」について
15	10月28日	金	知能情報学専攻	山形大学大学院 医学系研究科 教授 鈴木匡子	認知・行為と空間 - 壊れた脳から見えるもの -
16	10月14日	金	知能情報学専攻	東京大学大学院 総合文化研究科 広域科学専攻生命環境科学系 特任研究員 尾崎 隆	Dynamic causal modering vs. Granger causality analysis- 理論と実践、そして使い分け -
17	10月26日	水	社会情報学専攻	大阪大学大学院工学研究科 知能・機能創成工学専攻 准教授 中西英之	遠隔会議のデザイン：ビデオ・アバタ・ロボットは何の役に立つのか？
18	11月11日	金	知能情報学専攻	東京大学大学院 情報理工学系研究科 教授 國吉康夫	「身体と環境から創発し発達する知能」について

番号	開催日	曜日	主催	講師	講演題目
19	11月4日	金	知能情報学専攻	(有) IT プランニング 今井宜洋	「IT プランニングにおける関数型言語の利用」について
20	11月17日	木	知能情報学専攻	九州工業大学大学院 生命体工学研究科 准教授 我妻広明	脳型ロボット工学 脳神経科学 / ロボット工学融合の新たなアプローチ
21	10月27日	木	通信情報システム専攻	お茶の水女子大学 特任助教 Jesper Jansson	Combinatorial algorithms for constructing phylogenetic trees 「系統樹作成のための組合せアルゴリズム」
22	12月1日	木	知能情報学専攻	大阪大学 免疫学フロンティア研究センター 准教授 加藤和貴	「遺伝子配列の比較手法と生物進化解析」について
23	11月21日	月	数理工学専攻	筑波大学 准教授 水野貴之	ニュースの話題の移り変わりのダイナミクス
24	11月4日	金	通信情報システム専攻	インド統計学研究所 教授 Bhargab B Bhattacharya	On the Construction of a Rectilinear Routing Tree Amidst Obstacles 「障害物の存在する場合の直角ルーティング木の構成について」
25	11月29日	火	知能情報学専攻	国立情報学研究所 教授 杉本晃宏	視線・注視・注意の相互関係の解明
26	12月1日	木	通信情報システム専攻	University of Sydney School of Information Technologies, Professor of Software Technology Peter Eades	How to Draw a Graph, Revisited
27	12月15日	木	附属情報教育推進センター	パナソニック(株) AVC ネットワークス社 技術統括センター AVC 知的財産センター 参事 青柳忠穂	情報と知財
28	12月8日	木	通信情報システム専攻	Karlsruhe Institute of Technology (KIT) Institute for Theoretical Informatics 教授 Dorothea Wagner	Algorithm Engineering for Route Planning
29	12月1日	木	複雑系科学専攻	中央研究院数学研究所 Postdoctoral research fellow 陳逸昆	Boundary singularity for the Boltzmann equation
30	1月24日	火	社会情報学専攻	東京理科大学専門職大学院 総合科学技術経営研究科 教授 田中芳夫	情報学に社会から求められるアーキテクチャ設計
31	1月5日	木	知能情報学専攻	NTT コミュニケーションズ 科学基礎研究所 グループリーダー 五味裕章	身体運動のための情報処理メカニズム解明とモデル化
32	2月8日	水	知能情報学専攻	国立情報学研究所 准教授 総合研究大学院大学 複合科学研究科情報学専攻 准教授 稲邑哲也	全身感覚運動パターンの抽象化に基づく人間ロボット間の動作・言語表現の融合コミュニケーション - スポーツ動作のコーチングロボットへの応用 -
33	3月1日	月	複雑系科学専攻	静岡大学 工学部 講師 守田 智	ネットワークとゲーム理論
34	2月17日	金	社会情報学専攻	特定非営利活動法人 ITS Japan 交通物流プロジェクト 兼 渉外・産官学連携担当課長 八木浩一	東日本大震災における ITS の取り込み - 通行実績・道路規制情報 -
35	2月17日	金	社会情報学専攻	NHK 大阪放送局報道部 専任ディレクター 近藤誠司	東日本大震災の災害報道を振り返る - 社会的リアリティの構築をめぐる -
36	3月16日	金	社会情報学専攻	東京農工大学 総合情報メディアセンター 准教授 辰己丈夫	一般情報処理教育とは - 情報専門学科におけるカリキュラム標準 J07 を軸に -
37	3月16日	金	附属情報教育推進センター	(株) 情報技研 / Institute of Information Technology, Inc. 代表取締役社長 辻 秀典	電子教科書の動向

番号	開催日	曜日	主催	講師	講演題目
38	3月16日	金	附属情報教育推進センター	ハーバード・ビジネス・スクール 日本リサーチ・センター センター長 佐藤信雄	ケーススタディの情報教育への応用
39	3月16日	金	附属情報教育推進センター	福井赤十字病院 呼吸器科副部長 渡邊 創	情報教育推進センターの大学院情報教育を受講して
40	3月10日	土	知能情報学専攻	関西大学 人間健康学部 教授 小田伸午	スポーツにおける「主観と客観のずれ」
41	3月23日	金	システム科学専攻	独立行政法人 理化学研究所 情報基盤センターセンター長 兼 次世代計算科学 学研究開発プログラム 副プログラムディレクター 姫野龍太郎	世界最速スパコン「京」で拓く生命科学の世界

博士学位授与

【 】内は論文調査委員名

◎平成23年5月23日付京都大学博士（情報学）の学位を授与された者

[博士課程修了によるもの]

近藤 誠一

ロールベースアクセス制御拡張モデルと異種分散システム適用における設計・評価に関する研究
【吉川正俊・石田 亨・田中克己】

◎平成23年7月25日付京都大学博士（情報学）の学位を授与された者

[博士課程修了によるもの]

Unyanee Poolsap

Computational methods for predictions of RNA pseudoknotted secondary structures and RNA-RNA interactions (シユードノットつきRNA2次構造予測とRNA間相互作用予測に対する計算手法)
【阿久津達也・小林茂夫・後藤 修】

岡田 満雄

Asymmetric and Pseudo-Blind Digital Watermarking for Fair and Privacy-Secure Digital Content Trading (公平でプライバシーに配慮したコンテンツ取引のための非対称電子透かしおよび疑似ブラインド型電子透かし)
【岡部寿男・美濃導彦・上原哲太郎・岡本龍明】

◎平成23年9月26日付京都大学博士（情報学）の学位を授与された者

[博士課程修了によるもの]

橋本 力

Knowledge Acquisition from the Web for Text Understanding(テキスト理解のためのWebからの知識獲得)
【黒橋禎夫・田中克己・河原達也】

Andrey Kiselev

Incorporating Affective Behaviours into Virtual Agents and Evaluating Their Effects on Humans(仮想エージェントへの感情行動の組み込みと人間への影響の評価)
【西田豊明・乾 敏郎・山本章博】

河合 英紀

A Study on Search Methods for Knowledge Extraction and Structuring from the Web (Webからの知識抽出・構造化のための検索手法に関する研究)
【田中克己・吉川正俊・黒橋禎夫】

山本 岳洋

A Study on Interactions for User-centered Web Search (ユーザ主導型Web検索のためのインタラクションに関する研究)
【田中克己・石田 亨・吉川正俊】

Christian Vincenot

Hybridization of System Dynamics and Individual-Based Modelling as Solution to Modelling Issues in Ecology (生態学におけるモデル構築法としてのシステムダイナミクスと個体ベースモデリングの統合)
【守屋和幸・酒井徹朗・松原繁夫】

Ngo Tung Duc

Integrated Approach of Participation and Benefit Linkages for Effective Community Forest Management in Thua Thien Hue, Central Vietnam (中部ベトナム、フエ州トゥア・ティムにおける、効果的なコミュニティフォレスト管理への参加と利得の連関についての総合的な考察)
【酒井徹朗・石田 亨・守屋和幸】

Fadaei Hadi

Forest Inventory by Remote Sensing: Development of a Methodology to Measure aboveground Biomass in arid and semi-arid areas (リモートセンシングによる森林調査: 乾燥、および半乾燥地域における地上バイオマスの測定方法の開発)
【酒井徹朗・吉川正俊・守屋和幸】

山根 昇平

参加型シミュレーションのためのマルチエージェントアーキテクチャの研究
【石田 亨・喜多 一・湯浅太一】

Jee-Hun Park

Studies on Fault-Tolerant Control (耐故障制御に関する研究)

【杉江俊治・酒井英昭・太田快人】

I Wayan Mustika

Distributed Radio Resource Management for Self-Organizing Wireless Networks (自己組織化無線ネットワークのための分散無線資源管理)

【吉田 進・高橋達郎・守倉正博】

◎平成24年1月23日付京都大学博士(情報学)の学位を授与された者

[博士課程修了によるもの]**坂井信輔**

A Probabilistic Approach to Concatenative Speech Synthesis (波形接続型音声合成への確率的アプローチ)

【河原達也・奥乃 博・美濃導彦】

内山宏樹

ICカードのセキュリティプロトコルカスタマイズ技術に関する研究

【佐藤 亨・佐藤高史・岡部寿男】

◎平成24年3月26日付京都大学博士(情報学)の学位を授与された者

[博士課程修了によるもの]**Graham NEUBIG**

Unsupervised Learning of Lexical Information for Language Processing Systems (言語処理システムのための語彙的情報の教師なし学習)

【河原達也・黒橋禎夫・田中利幸】

Natalia Efremova

A hierarchical neural network model of object recognition and mental rotation (物体認識および心的回転の階層的ニューラルネットワーク・モデル)

【乾 敏郎・西田豊明・山本章博】

杉山磨人

Studies on Computational Learning via Discretization (離散化に基づく計算論的学習に関する研究)

【山本章博・阿久津達也・田中利幸】

小島健介

Semantical study of intuitionistic modal logics (直観主義様相論理の意味論的研究)

【佐藤雅彦・山本章博・五十嵐 淳】

五味秀仁

Fine-grained and Flexible Identity Management in Distributed and Open Environments (厳格な保護と柔軟な活用を両立するアイデンティティ管理技術)

【吉川正俊・田中克己・山本章博】

松原靖子

Statistical Data Mining for Time-series Datasets (時系列データ集合のための統計的データマイニング)

【吉川正俊・石田 亨・田中克己】

張 信 鵬

Knowledge Discovery about Relationship between Objects on the Web (ウェブ上のオブジェクト間の関係に関する知識の発見)

【吉川正俊・石田 亨・田中克己】

川本淳平

A Study on User's Privacy Protection against Query Analysis in Cloud Databases (クラウドデータベースにおける問合せ解析からの利用者のプライバシー保護に関する研究)

【吉川正俊・石田 亨・田中克己】

太田 絵一郎

脳・神経系のリズムに関わる数理的研究

【青柳富誌生・西村直志・船越満明】

上田健詞

STUDIES ON REGULARIZED NEWTON-TYPE METHODS FOR UNCONSTRAINED MINIMIZATION PROBLEMS AND THEIR GLOBAL COMPLEXITY BOUNDS (制約なし最小化問題に対する正則化ニュートン法とその大域的な反復回数の上限に関する研究)

【福嶋雅夫・田中利幸・山下信雄】

小林 匡

Study of Autonomous and Nonautonomous Higher Dimensional Integrable Equations (自励・非自励な高次元可積分方程式に関する研究)

【中村佳正・岩井敏洋・船越満明】

多羅間 大輔

Classical and Quantum Mechanics, and Complex Algebraic Geometry of Free Rigid Bodies (自由剛体の古典及び量子力学と複素代数幾何学)

【岩井敏洋・中村佳正・船越満明・成木勇夫】

ONG Bun Theang

Studies on Automatic Termination Criteria for Evolutionary Computation (進化的計算に対する自動停止規範に関する研究)

【福嶋雅夫・太田快人・酒井英昭】

林 匡 史

Risk-sensitive portfolio optimization and its applications (リスク鋭感的ポートフォリオ最適化とその応用)

【永持 仁・岩井敏洋・福嶋雅夫・関根 順】

原 田 耕 自

Studies on Parameter Estimation of Multipath Channels without Utilizing Pilot Signals (パイロット信号を利用しないマルチパス通信路のパラメータ推定に関する研究)

【酒井英昭・田中利幸・石井 信】

横 田 健 治

通信品質向上のためのネットワークシステム制御技術

【高橋達郎・吉田 進・高橋 豊・朝香卓也】

吉 田 誠

広帯域マルチキャリア無線伝送技術に関する研究

【吉田 進・守倉正博・酒井英昭】

吉 田 悠 一

Studies on Constant-Time Algorithms for Bounded-Degree Graphs and Constraint Satisfaction Problems (次数を制限したグラフと制約充足問題に対する定数時間アルゴリズムの研究)

【岩間一雄・永持 仁・伊藤大雄】

入学状況

平成24年度

区分 専攻名	修士課程		博士後期課程	
	入学定員	入学者数	入学定員	入学者数
知能情報学	37	39(9)	15	10(4)
社会情報学	36	38(5)	14	10(5)
複雑系科学	20	17(1)	6	2
数理工学	22	21(3)	6	2(1)
システム科学	32	30(0)	8	2
通信情報システム	42	42(5)	11	9(1)
合計	189	187(23)	60	35(11)

()内は外国人留学生で内数

修了状況

平成23年度修士課程修了者数

専攻名	修了者数
知能情報学	38
社会情報学	34
複雑系科学	13
数理工学	20
システム科学	25
通信情報システム	38
合計	168

荣誉・表彰

制御部門パイオニア賞

平成23年3月17日

東 俊一 助教 (システム科学専攻)
「動的量子化器の最適設計」に関する一連の研究によって数多くのすぐれた論文を発表し、制御理論の発展に大きく貢献した

学会賞論文賞 (システム制御情報学会)

平成23年5月18日

杉江俊治 教授 (システム科学専攻)
「Particle Swarm Optimization に基づく周波数領域におけるシステム同定」は優れた論文である

KDDI 財団優秀研究賞

平成23年3月24日

笠原正治 准教授 (システム科学専攻)
オーバーレイネットワークにおける自律分散型トラフィック制御機構」は情報通信の普及・発展に寄与

第10回船井研究奨励賞

平成23年5月28日

金子めぐみ 助教 (システム科学専攻)
「マルチキャリア・マルチリレーを用いた無線通信システムのためのリソース割り当て法」の研究は顕著な功績である

電子情報通信学会第 67 回
(平成 22 年度) 論文賞

平成 23 年 5 月 28 日
吉田 進 教授 (通信情報システム専攻)
「協力スペクトルセンシングを用いたコグニ
ティブ無線システムの開発と屋外伝送実験」は
電子工学及び情報通信に関する学問技術の発
展に貢献するもの

電子情報通信学会第 67 回
(平成 22 年度) 論文賞

平成 23 年 5 月 28 日
村田 英一 准教授 (通信情報システム専攻)
山本 高至 准教授 (通信情報システム専攻)
「協力スペクトルセンシングを用いたコグニ
ティブ無線システムの開発と屋外伝送実験」は
電子工学及び情報通信に関する学問技術の発
展に貢献するもの

人工知能学会研究会優秀賞

平成 23 年 6 月 2 日
奥乃 博 教授 (知能情報学)
尾形 哲也 准教授 (知能情報学)
「発語行為レベルの情報を用いた音声対話シ
ステムの構築とデータ分析」の研究は優秀と認め
られる

IEICE 通信ソサイエティ
BEST PAPER AWARD

平成 23 年 5 月 19 日
林 和則 教授 (システム科学専攻)
酒井 英昭 准教授 (システム科学専攻)
"Marginalized Particle Filter for Blind Signal
Detection with Analog Imperfections"

平成 22 年度 電子情報通信学会 功績賞

平成 23 年 5 月 28 日
高橋 達郎 教授 (通信情報システム専攻)

平成 23 年度「電波の日・情報通信月間」
総務大臣表彰

平成 23 年 6 月 29 日
吉田 進 教授 (通信情報システム専攻)
移動体通信において品質劣化の主な原因とな
る多重波伝搬特性の解明に尽力し今日の高速
移動体データ通信の発展に寄与するとともに、
電波利用の推進に大きく貢献した

Dahl-Nygaard Junior Prize 2011

平成 23 年 7 月 29 日
五十嵐 淳 准教授 (知能情報学専攻)
The foundation of object-oriented
programming languages and their type
systems

2011 年度解析学賞

平成 23 年 9 月 30 日
日野 正訓 准教授 (複雑系科学専攻)
複雑な構造をもつ空間における確率解析に関
する研究業績は優秀であり、解析学の発展に大
きく寄与した

The 14th International Symposium on Wireless
Personal Multimedia Communications 2011
Best Paper Award

平成 23 年 10 月 5 日
金子 めぐみ 助教 (システム科学専攻)
林 和則 准教授 (システム科学専攻)
酒井 英昭 教授 (システム科学専攻)
Fairness-Constrained Rate Enhancing
Superposition Coding Scheme for a Cellular
Relay System

2011 International SoC Design
Conference Samsung Award

平成 23 年 11 月 18 日
土谷 亮 助教 (通信情報システム専攻)
小野寺 秀俊 教授 (通信情報システム専攻)
A 10.3Gbps TransImpedance Amplifier with
Mutually Coupled Inductors in 0.18-um CMOS

IEEE Fellow for contributions to robot audition
technology

平成 23 年 11 月 21 日
奥乃 博 教授 (知能情報学専攻)

T.J. Tarn Bets Paper Award in Robotics of
ROBIO 2012

平成 23 年 12 月 11 日
杉江 俊治 教授 (システム科学専攻)
Volvot - A Spherical Mobile Robot with
Eccentric Twin Rotors

IEEE 関西支部 Gold 賞

平成 24 年 2 月 14 日
山本 高至 准教授 (通信情報システム専攻)

第 27 回電気通信普及財団賞
テレコムシステム技術賞

平成 24 年 3 月 19 日
金子 めぐみ 助教 (システム科学専攻)
林 和則 准教授 (システム科学専攻)
酒井 英昭 教授 (システム科学専攻)
「Uplink Contention-based CSI Feedback with
Prioritized Layers for a Multi-Carrier System」
電気通信についての工学的技術的観点からの
研究の振興と促進に寄与する論文が優秀である

平成 24 年 3 月 19 日
山本 高至 准教授 (通信情報システム専攻)
吉田 進 教授 (通信情報システム専攻)
村田 英一 准教授 (通信情報システム専攻)
「協力スペクトルセンシングを用いたコグニ
ティブ無線システムの開発と屋外伝送実験」
電気通信についての工学的技術的観点からの
研究の振興と促進に寄与する論文が奨励賞に
値する

日本鉄鋼協会 計測・制御・システム研究賞

平成 24 年 3 月 29 日
加納 学 教授 (システム科学専攻)
「物理・統計モデリングによる取鍋内溶鋼温度
の高度予測技術」は鉄鋼業における計測・制御・
システム技術の研究に大きく寄与する

2012 年制御部門研究奨励賞

平成 24 年 3 月 15 日
丸田 一郎 特定助教 (システム科学専攻)
「L1 最適化によるデータ圧縮に基づく PWA モ
デルの同定」は将来が期待される優秀な研究で
ある

2012 年制御部門大会賞

平成 24 年 3 月 15 日
丸田 一郎 特定助教 (システム科学専攻)
「L1 最適化によるデータ圧縮に基づく PWA モ
デルの同定」は理論として新規である上に有用
性も高い優れた研究発表である

人 事 異 動

[平成 24 年 2 月 29 日付]

准教授 通信情報システム専攻
八 杉 昌 宏
(九州工業大学へ転出)

[平成 24 年 3 月 31 日付]

准教授 知能情報学専攻
尾 形 哲 也 (早稲田大学へ転出)

准教授 数理工学専攻
鷹 羽 浄 嗣 (立命館大学へ転出)

准教授 通信情報システム専攻
伊 藤 大 雄 (電気通信大学へ転出)

教 授 通信情報システム専攻
湯 浅 太 一 (早期退職)

教 授 知能情報学専攻
小 林 茂 夫 (定年)

教 授 知能情報学専攻
佐 藤 雅 彦 (定年)

教 授 知能情報学専攻
後 藤 修 (定年)

[平成 23 年 5 月 1 日付]

准教授 通信情報システム専攻
山 本 高 至 (助教から昇任)

[平成 23 年 6 月 1 日付]

助 教 知能情報学専攻
糸 山 克 寿 (採用)

[平成 23 年 6 月 16 日付]

准教授 システム科学専攻
東 俊 一 (助教から昇任)

[平成 23 年 7 月 16 日付]

助 教 社会情報学専攻
清 水 敏 之 (採用)

[平成 23 年 10 月 1 日付]

助 教 知能情報学専攻
吉 仲 亮 (採用)

准教授 社会情報学専攻
山 肩 洋 子 (採用)

[平成 23 年 12 月 1 日付]

准教授 通信情報システム専攻
新 熊 亮 一 (助教から昇任)

[平成 24 年 2 月 1 日付]

教 授 システム科学専攻
加 納 学 (准教授から昇任)

[平成 24 年 4 月 1 日付]

助 教 通信情報システム専攻
高 瀬 英 希 (採用)

教 授 数理工学専攻
梅 野 健 (採用)

情報学研究科教員配置一覧

2012. 4. 1.現在

専攻名	講座名	分野名	担当教員名				備考	
			教授	准教授	講師	助教		
知能情報学	生体・認知情報学	生体情報処理			細川 浩	前川 真吾		
		認知情報論	乾 敏郎		水原 啓暁	笹岡 貴史		
		聴覚・音声情報処理 [連携ユニット]	[正木 信夫]	[西村 竜一]			P: ATR AP: ATR	
	知能情報ソフトウェア	ソフトウェア基礎論		五十嵐 淳			中澤 巧爾	
		知能情報基礎論	山本 章博	稲垣 耕作 Ⓢ CUTURI CAMELO, Marco			吉仲 亮	
		知能情報応用論	西田 豊明				大本 義正	
	知能メディア	言語メディア	黒橋 禎夫	河原 大輔			柴田 知秀 Ⓢ中澤 敏明	
		音声メディア	奥乃 博				糸山 克寿	
		画像メディア	松山 隆司	Ⓢ梁 雪峰	川嶋 宏彰 延原 章平			
	生命情報学			矢田 哲士			市瀬 夏洋	
兼担：知能情報学特別講義		□土佐 尚子 [特定教授]					学術情報メディアセンター	
メディア応用 ＜協力講座＞	映像メディア ネットワークメディア	美濃 導彦 岡部 寿男	椋木 雅之 宮崎 修一				学術情報メディアセンター	
生命システム情報学 ＜協力講座＞	メディアアーカイブ バイオ情報ネットワーク	河原 達也 阿久津達也	森 信介			秋田 祐哉 林田 守広 田村 武幸	化学研究所	
社会情報学	社会情報モデル	分散情報システム	吉川 正俊	馬 強			清水 敏之	
		情報図書館学	田中 克己	田島 敬史 Ⓢ JATOWT, AdamWladyslaw 山肩洋子			萩野 博幸 大島 裕明	
		情報社会論 (客)[連携ユニット]		[山田 篤]				AP: 京都高度技術研究所
	社会情報ネットワーク	広域情報ネットワーク	石田 亨	松原 繁夫 Ⓢ KINNY, David Nicholas			服部 宏充 Ⓢ中島 悠 Ⓢ林 冬恵	
		情報セキュリティ (客)[連携ユニット]	[岡本 龍明]	[真鍋 義文]				P: NTT AP: NTT
		市場・組織情報論 [連携ユニット]	[横澤 誠]	[木下 貴史]				P: 野村総研 AP: 野村総研
	生物圏情報学	生物資源情報学 生物環境情報学	守屋 和幸 酒井 徹朗	荒井 修亮 小山 里奈	Ⓢ TRIFKOVIC,Stanko		三田村啓理	
	兼担：サービスモデリング論 兼担：サービスモデリング論他 兼担：サービスモデリング論他		□原 良憲	□松井 啓之 □前川 佳一 [特定准教授]				経営管理大学院 経営管理大学院 経営管理大学院
	兼任：情報システム設計論Ⅰ及び演習 兼任：医療情報学 兼任：暗号と情報社会						□長瀬 啓介 ○谷 幹也 ○上原哲太郎	金沢大学附属病院 NEC 総務省
	地域・防災情報 システム学 ＜協力講座＞	総合防災システム 巨大災害情報システム	多々納裕一 矢守 克也	畑山 満則				防災研究所 防災研附属巨大災害研究センター
医療情報学 ＜協力講座＞	社会情報心理学	林 春男	牧 紀男				防災研附属巨大災害研究センター	
情報フルエンシー教育 ＜協力講座＞	医療情報学	吉原 博幸	黒田 知宏	竹村 匡正		糸 直人	医学部附属病院医療情報部	
複雑系科学	応用解析学	逆問題解析	磯 祐介			久保 雅義		
		非線形解析	木上 淳	日野 正訓	若野 功	藤原 宏志		
	複雑系力学	非線形力学	船越 満明	田中 泰明			金子 豊	
		複雑系数理 複雑系解析(客)		青柳富誌生	宮崎 修次		筒 広樹	
	応用数理学	計算力学	西村 直志			吉川 仁	原田 健自	
		知能化システム	山本 裕				永原 正章	
	兼担：複雑系科学特別セミナー 兼担：複雑系科学特別セミナー 兼担：複雑系科学特別セミナー 兼任：複雑系科学特論Ⅱ 兼任：応用解析学特論Ⅰ		北村 隆裕 榎木 哲夫 青木 一生					工学研究科 工学研究科 工学研究科 鳥取大学 お茶の水女子大学

専攻名	講座名	分野名	担当教員名				備考
			教授	准教授	講師	助教	
数理工学	応用数学	数理解析	中村 佳正	辻本 諭		上岡 修平	
		離散数理解析	永持 仁		趙 亮	福永 拓郎	
	システム数理解析	最適化数理解析	福嶋 雅夫	山下 信雄		林 俊介	
		制御システム論	太田 快人			㊦大木健太郎	
	数理物理学	応用数理解析 [連携ユニット]	[山本 彰]	[福本 恭]			P : (株)日立製作所 AP : (株)日立製作所
		物理統計学	梅野 健	五十嵐 顕人		佐藤 彰洋	
	数理ファイナンス<協力講座>				山口 義幸		
	兼任：応用数理工学特論 A 兼任：数理ファイナンス特論 兼任：金融工学			山下 浩 ○山本 零 瀬古 進		(株)数理システム (株)三菱UFJトラスト投資工学研究所 (株)三菱UFJトラスト投資工学研究所	
システム科学	人間機械共生系	機械システム制御	杉江 俊治	東 俊一		㊦丸田 一郎	
		ヒューマンシステム論	加納 学	西原 修			
	システム構成論	共生システム論		川上 浩司		平岡 敏洋	
		適応システム論	田中 利幸		大久保 潤	大関 真之	
	システム情報論	数理システム論	酒井 英昭	林 和則		金子めぐみ	
		情報システム論	高橋 豊	笠原 正治		増山 博之	
	論理生命学	石井 信		大羽 成征	前田 新一		
	医用工学	松田 哲也	中尾 恵		㊦今井 宏彦 ㊦高山 裕生		
	応用情報学<協力講座>	中島 浩	岩下 武史			学術情報メディアセンター	
	兼任：共生システム論等 兼任：医用システム論 兼任：計算神経科学他 兼任：計算神経科学他 兼任：計算知能システム論他		□塩瀬 隆之	○嶋吉 隆夫 川人 光男 銅谷 賢治 深井 朋樹 上田 修功		総合博物館 京都高度技術研究所 ATR OIST 理化学研究所 NTT	
通信情報システム	コンピュータ工学	論理回路	岩間 一雄 ㊦AVIS, David Michael			玉置 卓	
		計算機アーキテクチャ	高木 直史	高木 一義		高瀬 英希	
		計算機ソフトウェア				馬谷 誠二	
	通信システム工学	デジタル通信	吉田 進	村田 英一			
		伝送メディア	守倉 正博	山本 高至			
	集積システム工学	知的通信網	高橋 達郎	新熊 亮一			
情報回路方式		佐藤 高史	越智 裕之		筒井 弘		
大規模集積回路		小野寺秀俊	石原 亨		土谷 亮		
	超高速信号処理	佐藤 亨	乗松 誠司		阪本 卓也 ㊦瀧 宏文		
	地球電波工学 <協力講座>	リモートセンシング工学 地球大気計測	山本 衛 津田 敏隆	橋口 浩之 中村 卓司		山本 真之 堀之内 武	生存圏研究所 生存圏研究所
	兼任：プログラミング言語特論 兼任：通信情報システム特別研究1、2			○八杉 昌宏 萩原 剛志		九州工業大学 京都産業大学	
共通	兼任：計算科学特論 兼任：イノベーションマネジメント基礎 兼任：計算科学入門他 兼任：情報学展望4.5	○小山田耕二	○前川 佳一 ㊦矢作日出樹			高等教育研究推進開発センター 経営管理大学院 学術情報メディアセンター 学術情報メディアセンター	
			□山肩 洋子				
情報教育推進センター			田中 克己 ㊦中村 聡史 ㊦浅野 泰仁 ㊦木村 欣司 ㊦前川 佳一 ㊦矢作日出樹	㊦稲葉利江子 山肩 洋子		経営管理大学院 学術情報メディアセンター	

(参考)

1. 兼任・兼任について、無印：通年、○印：前期、□印：後期を示す。
2. 連携ユニット：予算措置されているもの 社会情報学専攻の2分野（情報社会論、情報セキュリティ）
研究科内措置によるもの 知能情報学専攻（聴覚・音声情報処理）、社会情報学専攻（市場・組織情報論）
数理工学専攻（応用数理解析モデル）
3. ㊦は特定教員を示す。

日 誌 (平成23年4月1日～平成24年3月31日)

平成23年

4月8日	専攻長会議
4月7日	大学院入学式
4月15日	教授会
5月13日	専攻長会議
5月20日	研究科会議・教授会
6月3日	専攻長会議
6月10日	教授会
7月1日	専攻長会議
7月8日	研究科会議・教授会
7月22日	臨時専攻長会議
8月12日	臨時専攻長会議
9月2日	専攻長会議
9月9日	研究科会議・教授会
10月7日	専攻長会議
10月14日	教授会
11月4日	専攻長会議
11月11日	研究科会議・教授会
12月2日	専攻長会議
12月9日	教授会
12月22日	臨時専攻長会議

平成24年

1月4日	新年挨拶会
1月6日	専攻長会議
1月13日	研究科会議・教授会
2月3日	専攻長会議
2月10日	教授会
2月19日	臨時専攻長会議
3月2日	専攻長会議
3月9日	研究科会議・教授会
3月26日	大学院学位授与式

情報学研究科評価・広報委員会 広報ワーキンググループ

評価・広報委員
広報担当 山本 裕

ワーキンググループ
メンバー 前川 真吾 服部 宏充 日野 正訓
山口 義幸 西原 修 村田 英一

事務担当 情報学研究科・総務掛